

---

# ご不要な魔導書買い取ります

夙多史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『ご不要な魔導書買い取ります

### 【NZコード】

N9538X

### 【作者名】

夙多史

### 【あらすじ】

私立凜明高校に通う平凡な女子高生 来栖月葉は、自宅の倉庫で見つけた古い本と睨めっこしていた。この本、不思議なことになにをやっても開かないのだ。どうしても内容が気になつた月葉が学校の友人に相談すると、常にオカルト的な本を所持しているクラスマイト 是洞真夜を紹介される。無口無表情で人を寄せつけない雰囲気を持つ真夜となんとか会話することに成功した月葉は、放課後、彼に教えられたとある場所に赴くことになる。 第8回 M F文庫ノライトノベル新人賞第1回予備審査2次選考通過を経て帰

つてきた作品。縦書きPDFだと文字化けする文字を使用しています。

公募投稿前に一度アップしていた作品ですが、見直しつつ一話一話更新していきたいと思います。毎日か週2更新かで迷っていますが、間を取って週3更新にします。更新曜日は月・水・金です。

薄暗く、じめつとした空気が肌を撫でる。どこかカビたような酸っぱい臭いが鼻につく。

高い天井にはいくつものノスタルジックな裸電球が均等に並べられ、その白く頼りない光が広い室内を照らしている。

窓はない。地下だからだ。部屋の空間自体は広いが、見上げるほど背の高い棚で埋め尽くされているためどうしても窮屈さが否めない。棚には漬物石代わりに使えそうな分厚い本が隙間なく収納され、塵一つ積もつていらないそれらから手入れに抜かりがないことが窺える。

そんな整備の行き届いた地下書庫内を、小学校高学年くらいの少年がじっくりと見回していた。綺麗な黒髪の、アジア系の端整な顔立ちをした少年である。

少年は書庫内を見回し終えると、黒真珠のような瞳に不満の色を宿し、呟く。

「魔術師協会『白き明星』が誇る魔書収容庫にしては、蔵書量が少ないな」

「はい。ここにある書物は全て、一級の魔書閲覧ライセンス所得試験に用いられる物です。『白き明星』が所有する蔵書量の数ペーペントにすぎません」

事務的に答えたのは、少年の後ろに付き添う形で直立している二十歳前後の女性だった。大学の卒業式などで見られるアカデミックドレスに似たローブを纏い、ショートに切り揃えた金髪に蒼い瞳をしている。

「それで、僕はどれを選べばいいんだ?」

「魔書の選定に関して私は口出しできません。ただ、ご存知かと思われますが、魔書には魔術書と魔導書の二種類が存在します。部屋の半分手前が魔術書、奥が魔導書の棚になっています。確かあなた

た様には魔力の素養がおありでしたので　　」

「ああ、だから僕は魔導書しか使えない」

引き継ぐように素っ気なくそつと、少年は教えられた通りに奥の棚を指す。

その途中、女性が感心するような口調で雑談をしてくる。

「それにしても、そのお年で一級試験を受けられるとは驚きです。しかも初めての試験とは信じられません」

「魔書を読むのにライセンスが必要だなんて、面倒なだけだ」

「しかしそうしなければ、過ぎた力に身を滅ぼす魔術師が続出します」

「わかつてゐる」

部屋の中心には魔術書と魔導書の棚を区切るために赤いラインが引かれている。少年はそのラインを跨ぐと、適当に棚から魔導書を漁り始めた。

どれも開けば意味不明な文字がびっしりと羅列されている。どこの国のかたでもない。これらの文字は全て暗号になつてしているのだ。それを読み解き、理解し、記された魔術を己の意思で使役することが魔書閲覧ライセンスの所得試験における実技である。そして、自ら魔書を選定する『目』も試験では評価されるのだ。

「どれもこれも単純だ」

数時間後、少年は積み上げていた五冊の魔導書をつまらなさうに元の棚に戻した。

「え？ 一級の複雑で難解な魔導書をもう五冊も読み解かれたのですか？」

「そうだが？ ……この辺りは似たり寄つたりだな。おい、もっとマシな物はないのか？」

信じられない、と女性は驚愕に目を見開いた。

「マシな物と仰られましても、ここに置いてある魔書は試験用に抜粋された評価し易い物ばかりですので。一級ですけど」

無茶苦茶な要求にあたふたする女性を、少年は黒い瞳で見上げ、

言つ。

「お前もここの案内人を務めているということは、一級以上のライセンスを持つ魔術師なのだろう？　お前の？書棚？にある物でいい。出せ！」

「い、一級は一級ですが、お生憎と私はただの魔術師です。？書棚？は当然として、一冊の魔導書も持ち歩いておりません。それに、魔書を？」自分で選ぶことも試験の一環ですよ」

チッ、と少年の口から舌打ちが聞こえる。そんな少年の態度に少々苛立ちを覚えた女性魔術師は、さらに奥へと向かう彼を追わなかつた。

そしてすぐに、追わなかつたことを後悔する」ととなる。

最奥部の棚を曲がった少年が、『それ』を見つけてしまつたのだ。

「なんだ、あれは？」

壁に埋め込まれた本棚の一番上の端に、淡く光輝く純白の表紙力バーをした魔導書があつた。明らかに他とは存在感が違う。それを、少年は持つてきた梯子を登つて手に取つた。

その場でページを捲り、じくっと喉を鳴らす。

「この魔導書、本当に一級なのか？　でも、これを実演できれば逸早く特級になれる」

満足げに笑い、少年は輝く魔導書を解読していく。

なかなか戻つてこない少年の様子を女性魔術師が見にやつて来たのは、それからさらに一時間が経過した頃だつた。

彼女は少年の持つ魔導書を訝しげに見やつた後、さつと血の気が引き、愕然とした表情になる。

「あ、あれは？永劫の器？の魔導書！？　なんで禁書がこんなところに…？」

女性魔術師の声が届いてないのか、梯子の上の少年は真剣に魔導書と睨み合つたまま振り向こうとしない。

「いけない！　早くそれを手離してくださいっ！」

叫ぶと同時に、少年はパタンと本を閉じた。声が伝わったのかと安

心しかけた女性だったが、残念ながらそうではなかつた。

少年は、禁書を読み解いてしまつたのだ。

瞬間、少年の持つ魔導書から閃光弾のように光が爆発し、地下書庫内を白一色に染め上げた。

「うわああああああああっ！？」「きやああああああああっ！？」

少年と女性魔術師の悲鳴が重なる。

痛みもなければ熱もない。そのような不思議な光に包まれている時間はほんの数秒ほどだつた。

視力が戻るのにさらに数秒。

女性魔術師の視界に映るものは、普段となにも変わらない地下書庫の寂れた風景。

ただし、梯子から落ちたのだろう、少年は仰向けに倒れたまま放心して動かない。それから先程まで彼が解読していた魔導書が、影も形もなくなつていた。

「た、大変なことに……早く報告しないと……」

女性は少年を置き去りにして踵を返すと、螺旋階段を駆け上つて地下書庫を後にした。

禁書に手を出したことで少年の精神が崩壊したのだと、勘違いして。

「うーん？ どうなってるんだろ？」

」

午前中の授業を終えた昼休み、来栖月葉は教室の窓際にある自分の席に腰掛けて難しい顔で唸つていた。

開け放たれた窓から初夏の温もつた風が入り、セミロングに伸ばした髪を靡かせる。今日は髪留めをつけ忘れたため、前髪が田の上でチラついて微妙に鬱陶しい。

いつもつけているお気に入りの髪留めを忘れるほど、月葉は今朝から別のこと�이가になつて仕方がなかつたのだ。

その『気になつて仕方なかつたもの』は今、机の上に置かれてある。

本だつた。それも辞書のように分厚くて重みのある本である。薄汚れた焦げ茶色の表紙には、アルファベットとは違つ見たこともない文字でタイトルが書かれている。世界史の授業で見た楔形文字になんとなく似てなくもない。

月葉は意を決した表情になり、本のページを捲ろうとするが

「うぐ……あーもう、やつぱり無理かあ

」  
そう、この本、どうやっても開かないのだ。接着剤かなにかでくつつけられているわけでも、実は本の形をした別物というわけでもない。まるで開こうとすると一ページがトン単位で重くなつたかのようにビクともしないのだ。今朝から月葉を悩ませている原因はこれである。

私立凜明高校に入学してから一ヶ月、個人的な悩みを学校にまで持ち込んだことなどなかつた。一体、この本はなんのだろうか。

「やはやは、月葉、さつきから眉間に皺寄せてなにしてんの？」

「せつかくの可愛らしいお顔が台無しになつてますよ」

腕を組んで黙考していると、一人の女子生徒から声をかけられた。

「あ、理音ちゃんに依姫ちゃん。えーとね、ちょっとと訊いてほしい

「んだけど」

「なにかななにかな？　あ、もしかして恋のご相談かい？　ふふん、  
だつたらばこの理音様にお任せあれ！」

底なしの明るい声で盛大に勘違ひしている彼女は、八重澤理音。  
整つた小振りの輪郭にパッチリとした大きな目、青みがかつた長い  
黒髪はうなじの上辺りで一つに結わえている。制服のブレザーは見  
事に着崩し、丈を短くしたスカートは明らかに校則違反しているが、  
週に一度抜き打ちで行われる服装検査にはなぜか一度も引っかかる  
したことのない曲者だ。

「え？　本当ですか？　月葉さんにもついに春が来たつてことです  
か？　お相手はやつぱり椎橋陽さんとかですか？」

丁寧でゆつたりとした口調とは裏腹に、瞳を爛々と輝かせて詰め  
寄ってきたのは紀佐依姫。きさよじひめ 肩甲骨辺りまで伸ばした髪をソバージュ  
にし、理音とは真逆にきつちりと制服を着こなしている。本人があ  
まり話さないためよく知らないが、彼女は紀佐財閥のご令嬢つ  
まり大金持ちのお嬢様だとか。

八重澤理音は高校から、紀佐依姫は中学時代からの気の合つ友人  
だ。

「もう、そんなんじゃないよ。これ！　この本について悩んでたの  
！」

月葉は机に置いてあつた本を両手で持ち上げて友人たちに示す。  
二人はまじまじと本を見詰めた後、興醒めしたように肩を落とした。  
「ずいぶんと古い本ですね。わたくしのお爺様が喜びそうです。そ  
れで月葉さん、この本がどうなされたのですか？」

「開いてみたらわかるよ」

そう言つて月葉は依姫に本を手渡す。依姫は恭しく受け取ると、  
表紙に細い指をかけて捲ろうとし 固まる。

「……ひ、開きませんね」

「そういうこと」

ぐぐつと力を込める依姫だが、彼女の華奢な手では数ミリたりと

も表紙は持ち上がらない。中学で空手部に所属していた月葉でも無理なのだ（人数合わせの幽霊部員だつたが）。

卷之三

ふんふん、ちょっと貸してみ依姫。今度はあたしかせてみるよ」と理音が依姫から本を引つ手繩り、その表裏を探偵のよつな顔で検分する。

「本當だ。どのページもピッタリくつついちゃってる感じだね」  
それから理音はコツコツと本をノックするよつと呴き、「とりや  
つ！」と天に放り投げ、ブンブンと高速に振り回したりもする。が、  
やはり本は捲れる気配を見せない。

それに少々ムツとした様子の理音は、次に本の表紙に手を添え  
「開けゴマ！」

- 7 -

- 1 -

もちろん、開くわけがない。

卷之三

怪しい笑い声が俯いた理音の口から漏れる。どうしたのかと月葉が彼女の顔を覗き込もうとすると

台か  
一〇

「つて理音ちゃんそれ破れる！？」  
「破れるからやめて！？」

「落ち着いてください、一理あるん！」

月葉と依姫が慌てて止めに入つていなければ、本は四階にある教室の窓から放り捨てられた上、焼却炉にまで運ばれそうだった。何事かと注目してきたクラスメイトたちに三人で平謝りする。「それにしても、どんなに乱暴に扱つても傷一つついていませんね。

不思議な本です

「もういいじゃん、月葉。捨てちゃいなよそんな本。読むことのできない本に価値なんてないよ。古本屋だつて買つてくれないと思うね。汚いし」

ふいつと本から視線を反らす理音は完全にへそを曲げていた。

「でも、私、どうしてもこの本の内容が知りたくて」「どうですか？」

小首を傾げて訊ねてくる依姫に、月葉は本の表紙を見せた。

「ほらここ、擦れてるけど『来栖月葉』って書いてあるよね？ これ、私のお母さんの名前なんだ」

「月葉のママって確かに、十年くらい前に死んだんだっけ？」「理音さん、言葉がストレート過ぎです」

「あ、ごめん」

「いいよ、別に。数えるほどしか会つたことなかつたし」

来栖月葉 月葉の母親は、海外で作家活動を行つていて家には滅多に帰つて来ない人だった。取材中になんらかの事故に巻き込まれて亡くなつたらしが、当時五歳だった月葉にはからうじて名前を知つてゐる遠い親戚が亡くなつたのと同じ感覚だった。

父親曰く、優しくて綺麗でカッコいい、生まれ変わつたならもう一度出会つて結婚したい人だそうだ。確かに写真で見る母親はその辺の女優よりも綺麗だつた。そんな人と結ばれたのだ、父親が再婚しないのも頷ける。

「私、お母さんの書いた本つて読んだことも見たこともないんだよね。たまたまうちの倉庫でこれを見つけて、なんか気になつちゃつて。お父さんも知らないって言つし」

今さら母親のことを知りたいと思うのは、遅いのかもしれないけれど、自分をこの世に誕生させてくれた人が残したものを感じないと言えば嘘になる。

たかが本であるが、これはただの本ではない気がするのだ。いやどうやつても開かない時点でただの本とは言い難いけれど、なにか

自分に訴えかけているよつたな、そんな不思議な感覚を月葉は覚えていた。

「じゃあさ、あいつに訊いてみる？ もしかするとなにかわかるかもしんなによ？」

理音が人差し指を立ててそつ提案してきた。彼女のなにかを企んでいるようなニヤ顔には『名案』と書かれてある。

「あいつって、誰のこと？」

「あいつだよ、あいつ。ほら、いつもオカルト系っぽい怪しげな

本読んでる顔はいいけどネクラな奴

「是洞真夜さん、ですか？」

依姫が微妙な表情をする。その名前は月葉も知っている。というか、クラスメイトだ。

理音の言う通り、常にじじいの国のもとも知れない分厚い本を持ち歩いてる男子生徒。無口無表情で人を寄せつけない雰囲気ががあるので、月葉は一度も会話したことがない。

「やついえば、是洞くんの持ってる本って私の本と似てるような…」

…

注意して観察したことなどなかつたので記憶はあやふやだけれど。「でしょでしょ！ 訊いてみる価値はあるつて。昼休みだから、たぶん図書館にいるはずだよ」

楽しそうに言いながら理音は月葉の手首を掴むと、「レッシンゴー」と掛け声をかけて歩き始めた。依姫もとりあえずといった様子でついてくる。

引っ張られる月葉は、つんのめりながらも理音に抗議することにした。

「ちょ、べ、別にそこまでしなくてもいいよ」

「月葉はどうしても本の内容を知りたいんでしょ？ あたしだって同じ気持ちだよ。絶対に開いて復讐を遂げてやるんだからフフフフフ

フ

またも地の底から響くような笑いを漏らす理音に、なにも言えな

くなる月葉だった。

凜明高校の図書館は、教室棟から総合体育館へ繋がる渡り廊下の途中にある。

体育館と同等の大きさを持つ丸っこいドーム状の建物がそれだ。一階と二階、さらに地下にまで本が詰まっているため、街の市立図書館よりも蔵書の量が多いという。

入口の自動ドアをくぐると、まず広々とした空間が視界に飛び込んでくる。一階は一部が吹き抜けになつており、天井のスカイライト・ウインドウから日光が差し込んでいるため照明をつけなくても充分に明るい。

一階部分は壁に沿つて本棚が並び、手前側には読書のためのテーブルと椅子がいくつも設置されている。奥側にはやはり本棚が所狭しと林立していて、受付横の検索機がなければ一冊の本を探し出すために相当な努力が必要そうだ。

「（ほらほら、やつぱりいた。是洞真夜、噂通りの本の虫だね）」

図書館では静かにというルールに則り、理音が声を潜めて月葉に目配せした。

最も奥の端に位置するテーブルに、ぽつんと一人だけ男子生徒がいる。

是洞真夜。耳にかかる程度に伸ばした混じりけのない綺麗な黒髪に、線の細い端整な顔立ちをした美男子だ。目や眉はやや吊り上がりいて人相悪く見えるけれど、その少し不良じみた部分に惹かれる女子もいるとかで密かに人気があるらしい。月葉にはよさがさっぱりわからない。

国語の先生が朗読の指名を避けるほど、彼は孤独オーラを全開にしているのだ。関わりたいなんてミニクロンほども思つたことはない。

ついたままでは……。

「（ほらほら、早く行きなつて月葉。当たつて碎けろだあー。）」

「（月葉さん、その、頑張つてください。ファイトです。）」

「（え？ なんで今から私が好きな男子に告白するみたいな雰囲気になつてるの！？）」

二人に背中を押されて月葉は男子生徒　　是洞真夜がいるテーブルへ恐る恐る歩み寄る。

足を組み、椅子の背凭れに背中を預け、片手で分厚い本を持つているその姿は、天窓からの日差しのせいだとなく神秘的な空気を纏っているように錯覚してしまつ。

「あのう、是洞くん、ちょっとといいでですか？」

月葉は控え目に声をかけた。なんか向こうで理音が「なぜに敬語！？」と叫び図書委員に怒られているが、今は無視しておく。

「……」

是洞真夜はただ無言で本を見詰めている。集中していて声が届かなかつたのだろうか。そもそも、目の前にいる月葉にすら気づいていないのかもしない。

「あのう、すみません。聞こえます？」

「……」

「もしもーし、是洞くーん？」

「……」

「あ、その本、少し破れますよ？」

「……」

興味を引きそうなことを口にしてもまったくもって反応がない。

ふう、と息をついた月葉は、離れたテーブルにいる理音と依姫を振り向き

「・れ・等・身・大・の・精・巧・な・お・人・形?

身振り手振りとアイコンタクトでそう伝える。

すると理音から同じようにジョンチャード返信が来る。

生・き・て・る・か・ら！ ペ・ー・ジ・捲・つ・て・る・か・ら！

「だよねえ」

溜息交じりに呟く。しかし話しかけても応えてくれないとなると  
……蹴り転ばすといつ恐ろしい提案が月葉の脳裏を過った。

と、その時

「僕の前で気持悪く躍るな。目障りだ」

本をテーブルに置き、是洞真夜が刃物のような視線を向けてそう  
言つてきた。彼の声はあからさまな苛立ちの色を含んでいる。

月葉は目を丸くする。

「声、初めて聞いた　　じゃなくって、気持悪いってなによ！　い  
きなり、それも女の子に向かつて失礼じやないかな！」

「知るか」

一言でバッサリと切り捨てられた。なんなんだこの人は、と月葉  
の彼に対する第二印象は推進エンジンを積んで悪い方向にぶつ飛んで  
いる。

「もしかしてだけど、是洞くん、最初から私のこと気づいてた？」

「向こうの一人と図書館に入ってきた瞬間から気づいていた」

「なんで無視したの？」

「めんどくさいから」

しつと答える是洞真夜。月葉は、うぐぐ、と苛立ちを堪えるために両拳を力強く握つた。

なんのこの人！　すっつごくムカつく！

これはもう諦めて帰つた方がいいかもしれない。そう本気で考え、  
無言で踵を返して立ち去ろうとした時

「で、僕になんの用だ？」

意外なことに、是洞真夜が引き止めてきた。振り返つた月葉は彼  
を半眼で睥睨する。

「めんどくさいんじゃなかつたのですか？」

ここで敬語に戻つたのは心の距離を置くためである。

「わざわざ僕に話しかけるような人間は少ない。それなのにお前は僕の気を引こうと変な躍りまでやつたんだ。なにか訳があるんだろう？　話くらいは聞いてやる」

「あ、あれは別にあなたの気を引くためにやつたわけじゃありません！」

それなら最初から無視なんてしなければ、月葉がここまで不快な思いをしなくてもよかつたのだ。やはり「もついいです」と断つて帰るべきかもしれない。

「その本が、関係しているのか？」

ビク。

的のど真ん中を射た彼の言葉に、月葉の肩が微かに跳ねる。彼は月葉が背中に隠していた『開かずの本』にもきちんと気づいていたのだ。

月葉はテーブルに置かれてある彼の本を見る。月葉の本と同じくらいの厚さに、楔形文字に似た表紙のタイトル。なにもかもがそつくりだ。

可能性が生じる。彼ならこの本について本当ににか知つてゐるかもしれない、と。

彼の無礼に対する怒りよりも、母親の残した本について知りたいという気持ちが勝つた。

「この本、どうしても開かないの。なにか不思議な力が働いてるみたいに」

敬語を取りやめて本を手渡す。受け取つた是洞真夜は適当に本の全体を見回し、背表紙の辺りでなにかに反応したように眉を顰める。「来栖杠葉、か。なるほど」

全てを悟つたように本を返してくる。彼の本の扱いは月葉に対する言葉遣いよりも遙かに丁寧でいて慎重だった。余程に本が好きなのだ。

「是洞くん、なにかわかったの？」

問い合わせてみると、彼はシカトして椅子の脇に置いてあつた学生カバンからボールペンとメモ用紙を取り出す。それからサラサラサラとメモ用紙に文字を書き込み

「放課後、そこに書かれてある場所へ来い。ここで話の続きをするわけにはいかないからな」

そう言つて月葉に押しつけるように渡すと、彼は図書館を去つていった。

「なんなのよ、もう」

メモ用紙には、どこかの住所が記されていた。

市の商店街から僅かに反れた裏通りのむらに奥。自転車がぎりぎりで通れるほどの狭い路地を抜けた先がメモ用紙に書かれている住所だった。

午後の授業を追えた月葉は、特に部活動などはやっていないためまっすぐにそこを田指した。理音と依姫は用事があると言つて校門前で別れたので、今は一人である。こんな怪しげな場所に単身突撃させるなんて薄情な友人たちだ、と心中で冗談半分に愚痴つてみる。「ここで、いいんだよね？」

誰にともなく呟き、月葉は目の前にある建物を見上げる。木造建築の大きな屋敷が堂々と構えていた。築五十年はあろうかという古風な雰囲気を醸し出しているそこには

「是洞古書店？」

玄関の大きな扉の上にある看板に、そう書かれてあつた。

「まさか売れつてこと？　あーでもでも、『是洞』つてことは……自宅？」

月葉は屋敷の前をうろついて様子を見ることにした。広めのガラス窓から窺える一階部分がどうやら書店になつているらしく、古い学校の図書室みたいな趣がある。一階に対して比較的窓の少ない二階部分は、恐らく自宅になつてているのだろう。

屋根に留まつた三羽のカラスが、月葉を威嚇するように「カア！」と鳴いた。

な、なんかコワイ。

そこまで寂れていながら、幽霊屋敷と言われたら信じてしまいそうな建物に恐怖心が沸き起つてくる。だが、このまま観察していくもこれ以上のことはわかりそうにない。変質者と思われるのも嫌なので、月葉は勇気を出して店の両開きの扉に手をかけた。キイイイイ。

扉を開く時の古めかしい音がホラー映画を連想させる。時間帯が夜中だつたら迷うことなく逃げ出している月葉である。

「……お、おじやましまーす」

薄暗い店内に月葉はオドオドしながら足を踏み入れる。古本独特の臭いが充満していいる店内には、誰もいない。月葉が背伸びしても一番上には届きそうもない本棚が、どうにか人の通れる隙間を残して並んでいるだけだつた。

そんな静謐極まる店内に カタカタカタカタ。

プロの料理人が野菜を刻む時に似たりズムで、アニメとかに出でくる骸骨の効果音みたいな音が響く。

ひつ、と漏れそうになる悲鳴を堪え、音が聞こえる方向を振り向くと

「だあああああああああ纏まんないいいいいいいいいいつ！…」「ふひやあああああああああああああああああああああああああッ！？」

突然の大声に、腰が抜けた。

「あら？ お客さん？ 「めんなさいね、気づかなかつたわ つて、大丈夫？」

L字型の会計台の後ろから、艶のある漆黒の長髪を纏めることなくストレートに下ろした女性が身を乗り出してきた。アルバイトの大学生だろうか、年齢は二十歳前後と思われる。スラリと背が高く、モデルとして雑誌に載つていそうなプロポーション。同性である月葉から見ても文句のつけどころのない美人だ。ついつい羨望の眼差しで眺めてしまつ。

「あわ……あわわ……」

腰さえ抜けていなければ。

「あはははっ、ごめんごめん、驚かせちゃつたみたいね。ほら、立てる？」

ペタンと床にへたり込む涙目の中葉に、会計台を身軽に飛び越え

た女性が優しく手を差し伸べてきた。

「あ、はい。……なんとか」

その手を取つてふりつきながらも立ち上がり、汚れたお尻を叩いてスカートを正す。

「それにしても可愛らしこ密さんね。ウチの弟と同級生くらいかしら？ 制服も凜明のブレザーダし」

薄暗い店内を照らすよつた明るい笑顔で、女性が円葉を品定めるように見詰めてくる。均整の取れた輪郭に目鼻口が芸術的なまでに配置されていて、ファンデーションすら使ってないらしい白い肌には染みも雀斑も見当たらない。着ているTシャツやジーパンはヨレしている上に安物のようだが、それを含めても綺麗な人だということは変わらない。

「えっと、店員さんですよね？ なにをされていたんですか？」  
オバケじやなかつことに円葉は胸を撫で下ろしつつ、氣になつたので訊ねてみた。

「ん？ ああ、ちょっと副業をね」

女性はどこか照れ臭そうにしながら会計台の裏に回り、椅子に座る。それから台に置いてあつたノートパソコンの画面を円葉に見せてきた。先程の音はキー ボードを叩く音だったようだ。

画面には日本語で書かれた文字が縦書きに綴られていた。

「これ、小説ですか？」

「うん、そう。だけど原稿の締切近いのに全然話が纏まらなくつてね。つい苛立つて叫んじゃつたのよ。ホント、驚かせてごめんなさいね」

「べ、別に気にしてないです。しかし、変な声上げちゃつてすみません」

ペコペコと頭を下げる円葉に、女性が苦微笑を返す。

「それで、この知る人ぞ知る是洞古書店になにか用？ 本探しだったらタイトル言つてくれればどこにあるのかすぐに教えられるけど？ あ、漫画や小説は少ないわよ。ほとんど私が頂いちやつてるか

「ら

「いえ、そうじゃなくて。この本を」

「

「売りに来たのね。オーケーよ。古書店だから買い取りもちゃんと行ってるわ

月葉の言葉は遮られ、カバンから取り出した例の本もスリのよくな早業で引っ手繩られた。

「本に関してウチはケチつけないからね。物によつてはそれなりに……」

月葉から引っ手繩つた本を見るや否や、女性は瞠目して時が止まつたかのように数秒間停止する。

そして

「あなた、魔術師だったの？ ライセンスランクはいくつ？」

よくわからないことを口にした。

「……へ？」

「マジユツシッテ……なに？」

今度は月葉が呆然とする番だった。

「あっちゃー、その反応からして違つたみたいね。ごめん、今の忘れてくれる？」

うつかり機密を漏らしてしまつたという様子で女性はおでこに手をあててそう言つてくるが、聞いてしまつたものは覆せない。月葉の口は自然と疑問を声にしていた。

「マジユツシッテ、あの魔術師ですか？」

「ああ、やっぱり忘れてくれないわけね。そりやそつよね。一般人にとつてはインパクト大だもんね」

椅子の背凭れに全体重を預けてぶつぶつと呴いた女性は、開き直つたような顔つきになつて月葉をまっすぐに見据えてきた。

「そう、その魔術師よ。あなたがイメージしたもので大まかには合つてゐると思うわ。あ、でも？ 魔法使い？ は行き過ぎよ。幕に乗つて

空飛んだり、呪文唱えるだけで火の球出したりできるわけじゃないの。そういうことするにしても、いろいろと準備しなければいけないのが私たち？魔術師？の面倒なところ

「

月葉は思いつ切りその？魔法使い？を想像していた。三角帽子と黒ローブを纏つた老婆が簾に跨つてているイメージを脳内から追い出し、訊ねる。

「私たちってことは、お姉さんも？」

「そうよ。私はなにを隠そ、魔術師協会『白き明星』公認の一級閲覧ライセンスを持つ凄腕魔術師なのよん」

語尾をふぞけた感じに碎き、ワインクまでする女性。この微妙に張り詰めた空気を緩くするためだろうが、正直、月葉にはなにがなんだかさっぱりわからない。魔術師はまだいい。信じているわけではないけれど、言葉の意味は理解できる。しかし、『白き明星』やライセンスといった単語は意味不明過ぎて頭の中で混沌の渦を巻いている。

「この人が今執筆している小説の設定ではないのか、そう思つ。

「信じられないって顔してゐるわね。別にいいわよ、信じなくて。この話はここで終わり。それよりこの本、どうも売りに来たつてわけじゃなさうね」

彼女の言葉に月葉は自分がここへ来た目的を思い出す。魔術師がどうのこうのという話は、月葉にはどうだつていいことなのでひとまず横に置いておく。気になるけれど。

「えつと、実はその本なんですけど」

月葉はどうしても聞くことのできない不思議な本のこと、それを見せた是洞真夜にこの店の住所を教えられたことなど、ここに至る経緯を搔い摘んで説明した。

黙つて聞いてくれていた女性は、ふうん、と思案顔になる。

「なるほどねえ、ウチの真夜がねえ。そういうことなら依頼は『鑑定』つてことでいいのかしら？」

「あ、はい。たぶん。つて、ウチの真夜？」

「あれ？ 言つてなかつたつけ？」女性はキヨトンとし、「私は是洞日和。<sup>れとうひよつ</sup>」この店の店主で、是洞真夜のたつた一人のお姉ちゃんよん」また碎けた調子で自己紹介してきた。言われてみれば、綺麗な黒髪といい、どことなく是洞真夜に似てなくもない。性格は全然違うけれど。

それに店主。てつきリアルバイトの人かと思つていた月葉は急激に恥ずかしさが込み上がつてくるのだった。

「あ、あの私、来栖月葉です。その、よろしくお願ひします！」

赤面した顔を隠すために頭を下げる月葉。すると女性 是洞日和は「ふふう」と囁き出すように笑つた。月葉の羞恥心ゲージがさらに上昇する。

「あははは。そんなに畏まらなくていいわよ、月葉ちゃん。面接じゃあるまいし。それじゃ、さくっと鑑定しちゃうわね」ぐぐつ。日和は早速手に入れて本を開こうとしたが、魔術師と名乗つていた彼女でも開くことはできそうにない。魔術師なら魔術でもなんでも使えるらしいのでは？ と皮肉めいたことを思いながら、月葉は鑑定の様子をぼーっと眺める。

「ふふつ。これはなかなか、強敵だわ」

唇を斜に構えて日和は呟くと、コツコツと本をノック。続いて上方に放り投げたり、ぐるぐると振り回したりして本に軽い衝撃を与えるようとする。

それからおもむろに立ち上がると、会計台へ置いた本にビシッと指を突きつけ、

「ちちんぴいぴい！」

怪我した子供を宥める時のおまじないみたいな呪文を唱えた。

「……」

当然のごとく、本にはなんの反応もなかつた。

あれ？ デジヤヴュ？

月葉は思わず苦笑した。日和の行動は理音に本を見せた時の流れ

にそつくりだ。

「うーん、参ったわね。中身が見れないことには判断のしようがないわ」

柳眉を寄せた困惑顔で日和は本の表紙、裏表紙、背表紙という順にチックしていく。どうでもいいけれど、そういうことは普通振り回す前にやるものではなかろうか。

「ん？ 来栖杠葉って……まさか、あの来栖杠葉！？」

背表紙の擦れた作者名を読み取った日和が目を見開いて素つ頓狂な声を上げた。

「お母さんを知ってるんですか？」

「知ってるもなにも、来栖杠葉って言えば魔術界では有名な魔書作家よ！ 十年前に亡くなつたって聞いてたけど、こんなところで彼女の魔導書にお田にかかるなんてテンション上がるわあ！」

キヤー！ なんて黄色い奇声を発して瞳をキラッキラと輝かせる日和。体を氣持悪くねくなさせて本当にテンションがおかしな方向へ振り切れている。それほどまでに月葉の母親の本は彼女にうて珍しく貴重な物だったのだろう。

それはともかく また胡散臭い単語が飛び出してきた。

「ま、魔導書ってなんですか！ これそんなに怪しい本だったんですねか！」

「あれ？ 月葉ちゃん、さつき『お母さん』って言った？ ということはなに？ 来栖杠葉の娘さん？ そういうえば苗字、来栖だったわね」

日和は月葉の質問など聞いちゃいなかつた。

「でも月葉ちゃんは魔術師じゃないんだよね。そういうことは教わらなかつたってこと？ 意外ねえ。絶対に才能受け継いでると思うのに、なんか勿体ないわ」

「日和さん！？」

バン！ 月葉は両手で会計台を強く叩いた。

それにパチクリと目を瞬かせた日和は、どうやら跳ね上がつてい

たテンションが急激に醒めてしまったようだ。月葉の狙い通りである。

「魔導書ってなんですか？　これ、そんなに怪しい本だつたんですか？」

先程と同じ質問を月葉は幾分か落ち着いた口調で繰り返した。

「そうね。月葉ちゃんが本当にこの本について知りたいって言うのなら、私たちのことをまず？信じて？もらわなきゃいけないわ」「信じるって……？」

是洞日和が凄腕の魔術師である、と信じろということだろうか。そんな荒唐無稽な話、信じる信じないの前に理解ができない。月葉は人を疑うことを知らない無垢な子供ではないのだ。実際にこの田でその『魔術』とやらを見なければ話にならない。

「そういうことだから、月葉ちゃんにも付き合つてもうおつかな。ちょっと待つてて」

日和は後ろの壁に設置されていた電話の受話器を取り、ボタンを押してどこかにかける。たぶん、内線だ。

「……あ、マヨちゃん。準備できる？　んもう、怒んないでよ。準備できてるならすぐに出発するわよ。あ、それとお密さん来てるから」

それだけ言つと、日和は受話器を戻して通話を切つた。

マヨちゃん？

恐らく他の店員だらう。お密がいないとはいえ、流石に店員が日和一人というわけはあるまい。

待つこと数分。会計横にあつたドアが静かに開け放たれ

「……フン、やはり密というのはお前か」

不機嫌そうな顔をした是洞真夜が現れた。

「え？」

月葉はポカーンとした。彼は私服ではなく学校の制服のままで、ポケットに手なんか入れて月葉を見下すような目で見ている。自分でここへ来るようにはメモまで渡しておきながらなにその態度…と怒

鳴つてやりたかったが、月葉の口は別の言葉を紡いでいた。

「……マコちゃん？」

真夜を指差し、日和を見る。日和はニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべていた。

「僕をそんな気持悪い名前で呼ぶな。鳥肌が立つ」

「『真夜』は『マコ』とも読めるでしょ？ 女の子だつたらそうなつてたらしいのよ」

「僕は男だ」

真夜の苛立ちが二割ほど増したような気がした。刃物のような目つきで睨まれたが、そんな可愛いあだ名を知ったからには全然怖くない。女装させたら似合いそうだなあ、と余計なことまで考えてしまつ月葉である。

フン、とマコちゃん、もとい是洞真夜は鼻息を鳴らす。

「悪いが、急な依頼が入った。お前の本についてはその後だ」

「あー、それなんだけどね、真夜。彼女も一緒に連れて行こうと思ふのう」

「は？ 正氣か、姉さん？」

真夜が無表情を少し嫌そうに歪める。いちいちこちらの神経を逆撫でしてくる態度だ。しかしそんな捻くれ者が『マコちゃん』……可笑しくてつい一ヤけてしまいそうになる。

「私は正氣よ。どの道、彼女には魔術師や魔書について講義しなきゃいけないでしょ？ 手間が省けるじゃない」

「それはそうだが、姉さんもついてくる気か？」

「あら？ 月葉ちゃんと一人きりになりたいの？」

「無理です！」

反射的に月葉は叫んでいた。こんな無礼が人の皮を被つて本読んでるような奴と一人きりになつた日には、気まず過ぎざる空氣に堪え切れず押し潰されてしまう。

そんな月葉に一人ともノーコメントで、何事もなかつたかのようにな会話を再開する。

「店に誰もいなくなる。先月空き巣に入られたことを忘れたのか?」「一般のお客さんなんて滅多に来ないから大丈夫よ。空き巣だつて、あの時より防犯術式を強化したから今度入ってきたら返り討ちにしてやるわ」

「小説は? 締切が近いんじゃなかつたのか?」

「息抜きよ、息抜き。それに私が行かないと誰が用葉ちゃんに解説するのよ?」

くつ、と真夜は押し黙つた。確かに彼は人になにかを教えることは苦手そうだ。

無口無表情で人を寄せつけないあの是洞真夜が、家族とはいこんなに会話をしている。そのことに新鮮さを感じながら、用葉はずつと気になつていたことを訊ねた。

「あの、日和さん、わつきからどこへなにをしに行く話をしてるんですか?」

「ふふふ、それはね」

日和は勿体ぶるよつこ少し間を空け、またも碎けた調子で言ひつ。

「魔導書の出張買い取りよん」

店の裏手を少し行くと、閑散とした狭い駐車場があつた。そこには『是洞古書店』とロゴの入つた白いMRワゴンが停められていて、月葉は流されるままに後部座席へと乗せられてしまった。

日和が運転席であることは当然として、真夜は助手席に腕を組んで座っている。どこへ向かうのか問うと、「ついてからのお楽しみよん」と秘匿された。たぶん、意味はない。

「別に、車で行く距離でもないだろ？」

走行中、真夜が不満そうに咳いた。気のせいか、若干顔色が悪いよみに思える。

「いいでしょ、楽なんだし」

「ガソリン代の無駄だ」

「練習しないと運転できなくなっちゃうでしょ？」

日和は真夜の文句をどこ吹く風といった様子で受け流していた。ほひなくして、月葉たちを乗せたワゴンは高級住宅地の一画にある一際大きな屋敷へと到着した。

日和が警備員と話をつけて門を開けてもらい、車のまま中に入る。そこにはゴルフ場でも造れそうな面積の庭園が広がっており、本館と思われる洋風の建物へ辿りつくまで五分の時間を要した。

玄関先に邪魔にならないよう車を停めて外へ出ると、月葉は視線を上に向ける。

「うわあ、凄い」

絵に描いたような大金持ちの豪邸を目にした月葉の第一印象がそれである。嫌味のない白い壁に莊厳な雰囲気、思わずこの場から見える窓を数えてしまつほど広い。洋館と言つよりは宮殿と言つた方がしつくりくる。

「（……車……なんて……なくなればいいんだ……）」

ふと隣を見ると、出発時よりも青い顔をした是洞真夜がぶつぶつ

と小声で呪いの言葉らしきものを呟いていた。

「是洞くん、大丈夫?」

「……」

「もしかして、車酔い?」

「……ひるさい」

正解のようだ。だから車内で散々文句を並べ立てていたのか、と月葉は納得する。学校ではロボットみたいに感情が動かないから、なんか面白い。

気分が優れないのに無理して立っている真夜に月葉がくすりとしている

「あら? 月葉さん?」

丁寧でやつたりとした、毎日のように聞いている声が耳に届いた。見ると、緩く波打つソバージュの髪をした少女 紀佐依姫が、恰幅のいい老年の男性と共に豪奢な玄関扉から出てきたところだった。

「依姫ちゃん! ? え? デリシャス?」

「どうしてと言われましても……」

困惑顔で小首を傾げる依姫は、学校の制服から白を基調としたノースリーブのワンピースに着替えていた。清楚なイメージのある彼女には凄く似合っていて、まさにお嬢様といった感じである。月葉ではとても着こなせそうにない。

「はい、わたくしのお家です!」

「え?」

といつことは、この豪邸は紀佐財閥の物といふことになる。月葉は素直に驚いた。依姫とは中学からの付き合いだが、私服を見たことはあっても屋敷に招待されたことはなかったのだ。

「月葉さんこそ、どうして是洞さんたちと一緒に?」

「えつと、これには私もよくわからない事情があつて」

煮え切らない月葉の回答に、依姫は頭上に『?』を浮かべる。

「依姫、知り合いかね?」

とその時、依姫と一緒に歩いてきた老爺が人のよさそうな笑顔で訊ねてきた。

「あ、はい、お爺様。わたくしのお友達の来栖月葉さんです」

依姫の簡単な紹介に合わせて月葉も軽く会釈する。と、なにが嬉しいのか老人は「おお、そうかそうか！」と上機嫌になつて歓迎するように両手を広げた。

「孫の友人が訪ねてくるなんて初めてのことじゃ。どれ、今夜は派手にパー・ティーでもするかの？」

「もう、お爺様。そういうことはやめてください」

依姫は自分が大富豪であることをあまり話したがらない。その理由を月葉は以前に聞いたことがあった。彼女は周りに大金持ちのお嬢様ではなく、対等な存在として接してもらいたいそうだ。月葉や理音はそんなことで態度を変えたりしないのだが、きっと、そういう人が多いのだろう。

「お取り込み中のところ悪いんだけど、紀佐財閥会長の紀佐桐吾さんで合つてるかしら？」

日和が商売人とは思えないフランクな口調で割り込んできた。彼女は金持ち相手だというのに全く怯んでいない。

「いかにも、儂が紀佐桐吾じやが……貴女も孫の友人かね？」

「いいえ、違うわ。私たちは是洞古書店の者よ」

きつぱりと否定し、日和は営業スマイルを浮かべてそう名乗った。「おお、そうか貴女が」紀佐桐吾は『待つたました』と言つのように、「いやはや、まさかこんな若くて綺麗な方が来るとは思わなんだ」「ふふ、誓めてもなにも出ないわよん？」

なんて言つているが、日和は満更でもなさそうだった。なんか隣で真夜が「性格はガサツだがな」と姉に聞こえないようにぼやいている。月葉はバツチリ聞き取つた。

「わざわざお越しいただき申し訳ない。本来なら儂らが店まで出向くべきなんじやが、訳あって本を持ち出せない状態での」

「それは構わないわ。早速だけど、売りたい本つていうのはどこに

あるのかしら?」「

「ふむ、じつちじや。屋敷の裏にある儂専用の倉庫に保管しておる」  
そう言って桐吾は屋敷を周回するよつこ歩き始めた。彼の後ろを  
日和と真夜もついていく。

依姫が月葉を見る。

「月葉さんはどうなされます? わたくしのお部屋にでもご案内しましようか?」

「ううん、依姫ちゃん。私は

「なにしてんの月葉ちゃん! 置いてくわよー!」

上半身を捻つてこちらを向いた日和が大声で月葉を呼んでくる。  
並んで歩く真夜は迷惑そうに指で耳栓をしていた。

「そうこうことだから、私も行かなくちゃ」

「わかりました。では一緒に参りましょうか。わたくしも、これから起じることに興味がありますか?」

「え?」

依姫の意味深な台詞を訝しく思つた月葉だったが、再度日和から  
督促の声がかかつたため疑問は一旦横に置いておくことにした。

タタタッと駆け足で三人の後を追う。

一体、この先になにがあるんだろう?

チラリと横目で依姫を見る。普段と変わらない柔らかな表情をしているが、彼女は月葉よりも先に進んだなにかを知っている、そんな風に思えた。

倉へ向かいながら、月葉は『売りたい本』について訊いてみた。

「お爺様は古書コレクターなのです」

依姫が世間話をする感覺でそう答える。

「古書コレクターって？」

「世界中の初版本や限定本、絶版になつた古い書物、そういうつた稀覯本を集めることが趣味のことですよ。お爺様の書庫には三千冊を優に超える珍しい本が大事に保管されています」

三千冊と聞いて月葉の目が点になる。小規模な図書館くらい造れそうだ。

「わ、私にはわからない趣味かな」

「同感です。全部読めもしないのに、集めるだけで満足する気持ちはわたくしにも理解できません」

孫の依姫にはつきりと趣味を否定され、たはは、と先頭を行く桐吾は苦笑いを漏らした。

「つい先日のことです。お爺様がどこかのオークションで落札した大量の古書の中に一冊、いわくつきの本が混ざっていたのです。『売りたい本』とはそれのことですよ」

「い、いわくつき……？」

「はい。その本を持つていると、青白い光を放つ怪物に喰い殺されると言われているのです。わたくしが調べたところ、確かにこれまでの所有者は例外なくなんらかの事故でお亡くなりになられていました。ミステリアスでとても興味深い話だとは思いませんか？」

「う、うん」

依姫は笑顔で語っているが、月葉は自分から血の気が引いていくのを自覚せずにはいられなかつた。そういう怪談話は得意ではないのだ。

「光る怪物かどうかはわかりませんが、倉を掃除していた屋敷の使

用人も一名、人魂のようなものに襲われて軽傷を負っています。おかげで倉へ近づくことができなくなりましたが、本日は専門家の方がいらっしゃることでこうしてお供させていただいています。まさかそれが是洞さんだとは予想外でしたが、一体どのようなことをなさるのでしょうか？　ああ、凄く楽しみです！　気になりませんか月葉さん！」

「え？　なんか依姫ちゃん、テンション上がってない？」

いわくつきの本を語つていくに連れて依姫の語気が強くなっている気がした。いや、氣のせいではない。彼女は胸の前で祈るように手を組んで恍惚とした表情をしている。

「そうそう、凜明高校にも不思議な話がたくさんあることを月葉さんはご存知ですか？　どこにでもある学校の七不思議みたいな陳腐な話ではありませんよ。図書館にある謎の地下室、秋に咲く中庭の桜の木、特別教室棟屋上に描かれた巨大魔法陣、わたくしもまだ全てを知っているわけではありませんが、これらは実在するものです。一つ一つを想像してみるだけでドキドキできませんか？　時間を見つけて徹底的に調べてみたいですね。ああ、名門女子校を蹴つてまで凜明に入学した甲斐がありました」

「あ、あの、もしもし？　依姫ちゃん？」

依姫と付き合い始めて三年と少しになるが、月葉はこれほど輝いている彼女の顔を見たことがない。

依姫ちゃんつて、もしかして……。

「わたくしはいすれ、世界中の超自然的な不思議に触れてみたいと思っています」

オカルトマニア？

「よひしければ、その時は月葉さんも一緒にしませんか？」

「えーと、私は遠慮しとくよ。あはは……」

月葉は若干引いていた。引き攣った笑みが元に戻らない。別に依姫がオカルト大好きだからといって友達をやめることにはならないが、その趣味だけは古書コレクターよりも合わない自信がある。

「あつ……すみません、月葉さん。わたくしつたらつい。このことは学校では内緒にしていてもらえないですか？ その、変な子と思われたくないのです」

「うん、大丈夫。言い触らすよくなことはしないよ」  
彼女の意外な一面を知つてしまい動搖が隠せない月葉だったが、同時に得心もっていた。お嬢様で頭もいい依姫がどうしてそこまで偏差値の高くない凜明高校に入学したのか、ずっと疑問に思っていたのだ。「月葉さんと離れ離れになりたくないからです」なんて嬉しいことを言つてくれていたが……たつた今、本音を聞いてしまった。

「凜明高校は魔術師が創設した学校だからねえ。魔術的な施設や設備が未だに残つてゐるよ。私が在学中に全部暴いてやるひつとしたけど、流石に謎の数が多くて叶わなかつたわ」

いつの間にか月葉の隣に並んでいた日和が昔を懐かしむように絡んできた。

「そういう噂は私も多少は聞いたことがありますけど つて、日和さん、OGだつたんですか！？」

「そうよん。私は月葉ちゃんたちと入れ替わりに卒業したのよ」

「へ、へえ」

もつと年上だと思つていた月葉は張り倒されても文句は言えない。「まあそんなことよりも、月葉ちゃんが紀佐財閥のお嬢様と友達だつたなんて驚きだわ。 どうも、紀佐依姫ちゃん。私は是洞日和。あそこのムスッとした可愛くない坊主のお姉ちゃんよん。 よろしくね」

「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願ひします」

簡単に挨拶を交わす日和と依姫。「今後とも当古書店をご覧貲にしてねえ」と日和が媚びるように付け足すと、依姫は困つたような顔で生返事をしていた。たぶん、こういう人がいるから依姫は家柄のこと話をせないので。

と、月葉は前を歩く真夜がこちらを鬱陶しそうな目で見てくる

とに気がついた。

「是洞くん、どうかした？」

訊くと、ふいっと顔を前に反らされた。月葉は少しムカツとした。  
「ほーら、真夜も会話に混ざりなさい。ずっとだんまりだと存在感  
なくなるわよー？」

「フン、そんなものなくて構わん。だいたいキャーキャーうるさい  
んだ、お前たちは」

相も変わらずつれない態度の真夜に、日和はやれやれと肩を竦め  
るのだった。

女子三人でたわいのない談笑を始めてから約三分、屋敷を半周し  
たところで桐吾が立ち止まり、前方を指差した。

「あれが例の本を保管してある倉じや」

そこには常緑樹の林を背景に中規模アパートくらいの建物が鎮座  
していた。『倉』と表現するほど薄汚れた感はなく、寧ろ誰かが普  
通に暮らしているような『家』に近い構築だった。

「あそこはお爺様の書庫にもなっているのです」

と、依姫。あれば書庫なら一般庶民たる月葉の血毛なんてウサギ  
小屋だ。

「……なんか、嫌な感じしない？」

先程まで気持ちよく晴れ渡っていたのに、見上げると分厚い暗雲  
が立ち込めていた。そのせいか、一軒だけ佇む倉が不気味な雰囲気  
を纏っているような気がした。

不安になる月葉だが、一人立ち止まって引き返せるほど空氣を読  
めない人間ではない。内心ビクビクしながら皆について歩き、倉の  
入口まで残り十メートルを切ったその時

「下がれ」

真夜が一言でそう命じた。彼の表情は特に変化していないが、そ  
の声は険呑な色を孕んでいた。

「はいはい、みんなあと三メートルほどバックして

「日和さん、なにが始まるんですか？」

「うん、後で説明するから今はとにかく下がつて」

日和に促され、月葉たちはわけがわからないまま真夜を残して後退する。

次の瞬間 バリバリズドーン！！

耳を劈くような激しい雷鳴と共に、一本の青白いプラズマが書庫となっている倉を貫通した。

「きやつ！？」

反射的に目を閉じ縮こまる月葉。少し経つてからそっと目を開くと、炎上し一部が崩壊した倉の中から、なにかが浮かび上がってくるところだった。

あれは……本？

だつた。月葉の見ている幻覚や夢でなければ、確かに本が宙に浮いていた。しかも帶電しているのか、青白い火花をバチバチと散らしている。

「やはりあの魔導書、暴走しているようだ」

真夜が冷静な口調でそう言つた。しかし彼の言葉は月葉をさらに混乱させる。

「ひ、ひひ日和さん！ なんなんですか！ アレなんなんですかっ！ 魔導書つて一体なんですかっ！？」

「ちょーっと落ち着こうね、月葉ちゃん」

「 ッ…？」

ぎゅ むつ、と月葉は日和に抱き寄せられ、彼女の豊満な胸に顔を埋められる。温かくて柔らかい。そんな優しい感触が、息苦しくて「うーうー」と呻く月葉の狼狽を別の意味にシフトさせる。

「大丈夫？ 話聞ける？」

「は、はい……窒息するかと思いましたけど」

まだ動悸が収まらない。月葉の顔は耳まで真っ赤になつているが、日和の突飛な行動のおかげで周りの様子が目に入る程度には心を鎮めることができた。

桐吾と依姫は先程の落雷に驚いて腰を抜かしている様子。二人とも口をぱくぱくさせて陸に打ち上げられた魚みたいだ。ただ依姫だけは日が煌めいているように見えるが、きっと気のせいだろう。

「あそこに浮いてるのが、今回私たちが買い取りにきた魔導書。これはオーケー？」

「はい、オーケーです」

あんな怪奇現象的な本を魔導書と言わずしてなんと言つか。頭では夢だと否定しようとしている自分がいるが、見てしまったものを受け入れる自分が圧倒的に強かつた。

「うんうん、月葉ちゃんはどうじやの坊主と違つて素直でいい子だねえ」

よしよしと頭を撫でられる。落ち着かせよつとしてくれているのはわかるけれど、そんな子供扱いに月葉は少し唇を尖らせるのだった。

た。

「姉さん、ついて来たのなら遊んでないで働いてくれ」「働いてるわよ。今結界を張ること」

苛立たしげな真夜の声に日和は答えると、腰に提げている小学生の時から使つていそうな可愛らしいけど古びれたポーチに手を突っ込んだ。そしてそこからじやらりと鷺掴んだものは　大量の色鮮やかなプラスチックビーズ。

「それじゃあ、月葉ちゃん、お待ちかねの魔術を披露してあげるわ」日和は月葉に向かつてウインクすると、ビーズを頭上に放り投げた。するとビーズは不自然な軌道で空中を走り、月葉たちを囲むように地面に散らばる。

え？

月葉は呆然とする。ぽわつ、と七色の淡い輝きがビーズから発生したかと思えば、その輝き同士が結合して大きな五芒星を描いたのだ。月葉たちは五芒星の中に立つてている形で、真夜だけが外にいる。手品ではない。実際にこの日で見たからわかる。今の流れは『手品』なんて言葉じゃ片づけられないほど自然を超えていた。

「魔術……本当に……魔術師？」

「そうよ。これは身を守るための結界だから、陣の外に出ると危ないわよ。 あつ、ビーズは動かさないでね。配置、色の順番、全体の図、そういうこと一つ一つに意味があるから少しでもずれると機能しなくなっちゃうのよ」

日和が注意したのは月葉ではなく、輝きに触れようとしていた姫だった。彼女はコクコクと頷くと、これから映画でも観賞するかのような顔をして祖父の横に正座した。

「日和さん！ 是洞くんが！」

浮遊し帶電しているという、どう考えても危なそうな本書とやらに近づいている真夜を見て月葉は焦った。彼もこの結界に入れなくてもいいのだろうか。

「ああ、真夜なら心配しなくとも大丈夫よ」

弟が危険に飛び込もうとしているのに、日和はそれをさも当然といった様子で見てている。だが、そこに感じられるものは無関心ではなく、強い信頼だった。

「是洞くんも魔術師なんですか？」

「正解だけどハズレ。私はただの魔術師だけど、真夜はそつじゃないのよ」

「どうしたことですか？」

「魔導書使いつて言つてね。魔術師よりは魔法使いに近い感じかな。魔導書のことは魔導書使いに任せるのが一番なのよねえ。まあ、見てればわかるわ」

今はそれ以上説明する気がないらしく、日和は視線を真夜に戻した。だから月葉も黙つて彼を見守ることにした。

バチバチ！ バリリイ！

青白くスパークする魔導書を真夜はただ見上げている。一体どうするのだろうかと月葉が不安げに思つていると すつ。 真夜は右手を真横に翳した。

「第三段第四列」

唱えるように咳くと、真夜はその右手でなにもない空間から一冊の本を引き抜いた。

「 ? 火弾？」

パラパラパラ。本が風に煽られるように物凄い勢いで捲っていく。すると本の手前に魔法陣みたいな赤く幾何学的な紋様が展開し、轟！ と中心部からバレーボールほどの大きさをした火炎が射出された。

「!？」

驚愕する月葉の視界を、灼熱の火炎球が電気纏う魔導書へとまつすぐに飛んでいく。

そして、直撃。

大地を振動させるほど凄まじい爆発音が響き、電気纏う魔導書は激しく炎上した。

「も、燃やしちゃった……」

「燃えないわよ」

日和が横から即答する。

「いいかな、月葉ちゃん。魔術界で一般的に魔書と呼ばれる本は二種類存在するの。魔術書と、魔導書ね。魔術書は学校の教科書みたいなもので、言つてしまえばただの指南書。だけど魔導書つてのは、真夜が今やつたようにそれだけで特定の魔術を発動させる魔法のアイテム的な代物なのよ。しかも特殊な力が働いていてね、どんなことをしても傷一つつかない」

すぐには理解できない説明を受けたが、最後に言われたことには覚えがある。月葉が持っていた『開かずの本』は、どれだけ乱暴に扱おうとも折れ曲がりすらしなかった。

「でも魔導書の厄介なところはそこじゃなくって、きちんとした処置をしないと勝手に魔力が蓄積されて暴走するところなのよ。アレみたいに。ほら、真夜が刺激したから反撃がくるわよ」

言われて月葉は空中で炎上する魔導書に視線を戻した。とその時、燃え上がっていた炎が破裂するように内側から弾け飛んだ。

現れた魔導書は、焦げ跡一つついていない。その魔導書から青白い雷撃が迸ったかと思えば、雷撃は真夜ではなく、彼の手前の地面に炸裂した。地雷を起爆させたように芝生ごと大地を爆散させる。土煙が巻き上がる中、そこから全身青白く発光する狼に似た姿の四足獣が出現した。

「あ、あれって依姫ちゃんが言ってた……」

体中からバチバチと家電がショートしたような音が聞こえる。あれは生き物が雷を纏っているのではなく、雷が獣の形を取っているようにも思えた。

「フン、？雷獣？の魔導書か。ライセンスランクは二級といつたところだな」

一人で納得する真夜に、雷獣が咆哮代わりに雷鳴を轟かせ、飛びかかる。

「第四十三段第十列」

慌てる様子もなく真夜はまた唱えると、火球を出した魔導書を空間に消し、別の魔導書を引き抜いた。

「？粋護？」

真夜は一冊目の魔導書を開き、襲い来る雷獣へと突きつける。瞬間、雷獣は見えない壁にでもぶつかったかのように弾かれた。目を凝らすと、真夜の周囲を力場的な光の層が半球状に覆っているのが見える。

防御魔法？

月葉は漫画や映画などの感覚でそう思つたが、たぶん間違つてはないだろう。

地面を転がつて芝生を発火させた雷獣がゆっくりと四足で立ち上がる。そして威嚇するよつに真夜を睨み、唸り声に似た雷鳴を発する。

それから雷獣は姿勢を低くすると バリッ。

青白い残光を引き、雷速で真夜へと突貫した。

?粹護?とかいう光の層と雷獣が激突する。凄まじい放電現象が発生し、のたうつ雷が大地を深く抉る。

チツ、と真夜の舌打ち。放電が収まった時、光の層も雷獣も消えてなくなつていた。雷獣は捨て身の一撃で真夜の防御を破つたのだ。バチャイイ！！

再び空中に浮遊する魔導書　　?雷獣?の魔導書からスパーク音と雷光が閃く。直後、?雷獣?の魔導書から巨大な光柱が天を衝く勢いで立ち昇り、上空で千々に飛び散つて隕石のように落下していく。

「あやつ！？」

無作為に降り注ぐ雷撃雨の一つが月葉たちの頭上に落ちる。何百万ボルトあるかわからない雷を受けたら普通の人間である月葉なんて簡単に死んでしまう。逃げ出す暇なんてない。咄嗟に頭を庇う月葉だったが……なんともなかつた。

「ほらね、結界の中にいれば安全よ」

顔を上げると、そこには日和の安心させるような笑顔があつた。

雷撃雨は彼女の結界に阻まれて内部まで入り込むことはなかつたのだ。ひとまずほつとする月葉。

だが、あれは?雷獣?の魔導書。雷撃雨だけでは終わらない。

全ての雷撃雨の落下地点に、最初のものと同じ狼に似た雷獣が現れていた。

何匹いるのか数えられないほどの雷獣たちが月葉たちを包囲し、徐々にその輪を縮めてくる。今度こそ月葉はへたり込みそうになった。

「あーらら、これは厄介ねえ。真夜、襲われる前にアレで一気に片づけなさい」

「フン、言われなくてもそうするつもりだ」

言葉とは裏腹に全然厄介そうじやない日和に、真夜はぐだらなそうに鼻息を鳴らす。そして二冊目？ 粋護？ の魔導書を虚空に消し去り、

「第百六段第十二列」

また新しい魔導書を取り出し、開く。

「？千刃？」

刹那、上空に巨大な魔法陣が展開され、そこから無数の西洋剣が飛び出した。

両刃や片刃、小剣から大剣まで多種多様な形をした西洋剣が大気を引き裂くように四方八方へと飛び、周囲を取り囲んでいた雷獣たちだけを正確に仕留めていく。

当然逃げ惑い剣をかわす雷獣もいる。が、雷獣の数よりも飛んでくる剣の方が遥かに多い。かわしたところで別の剣が刺さるだけである。剣に貫かれた雷獣たちは、雷音の悲鳴を轟かせて次々と消滅していく。

「す、凄い……」

まさに剣の嵐と言える光景に呆然としつつ、月葉は感嘆の声を漏らした。魔術を否定する心などとつこの昔に塗り替えられている。この二人は、是洞姉弟は、確かに魔術師という非現実的な存在だ。それはもう、認めるしかない。

雷獣たちを一掃するのに十秒とかからなかつた。

「……」

真夜は辺りを見回して雷獣が残っていないことを確認すると、三冊目の魔導書もどことも知れぬ空間に仕舞つた。それを合図に、辺

り一面に突き刺さっていた西洋剣が空気に溶けるようにすうと消える。

ふつ、と浮かんでいる？雷獸？の魔導書の纏つていた電気が消失した。かと思うと、？雷獸？の魔導書は力尽きたように半壊した倉の瓦礫の上に落下する。

空を覆っていた暗雲も流れ、夕日に焼けた色が覗く。

終わったの？

「日和さん、あれ、どうなったんですか？」

真夜が？雷獸？の魔導書を拾い上げて何事もなく汚れを叩いているのを横目に、月葉は日和に状況説明を求めた。

「さっきのでの魔導書が溜め込んでた魔力が尽きたのよ、月葉ちゃん。暴走した魔導書を鎮めるには、ああやつて魔導書が魔力を使い切るまで相手してあげればいいのよん」

砕けた調子で言い終わると、日和はパチンと景気よく指を鳴らした。すると、結界を構成していた五芒星の魔法陣が光を失い、魔法陣を描いていたビーズが磁石で砂鉄を吸い寄せるように日和の掌に戻った。日和はそれらをジャラジャラとポーチに放る。

そんな非科学的な光景を前に、月葉は感動しつつふと思つ。

「あの、日和さんもあんな凄いことができるんですか？」

「ん？ それは私も真夜みたく魔導書を使えるかつてこと？」

「クンと頷くと、日和はどこにツボがあつたのか快活に笑つた。

「あはははは、ムリムリ。さつきも言つたけど、私はただの魔術師だから」「…………？」

「あつ、そうか、それも教えないとかわんないわよね。魔術師と魔導書使いの決定的な違いは、魔導書を使う使わない以前に魔力を持つてるか持つてないかなのよ」

「魔力を…………？」

魔術師を認めてしまったので月葉はなんの疑問もなく受け入れていたが、『魔力』というのはつまり、魔術師が魔術を使用するため

に消費する力のことだろ？ ゲームで言うMPみたいに。

「そう。魔導書は使用者の魔力を喰らつて発動するから、魔力の素養がない人間には扱えないのよ。だから私みたいな魔力を持たないただの魔術師は、自然からエネルギーを集めて魔力に変換し、魔術を発動させてるつてわけ。逆に魔導書使いは自分の魔力が邪魔して自然からエネルギーを集められないから、普通の魔術は使えなかつたりするの。あー、どっちが強いかなんて子供っぽいことは訊かないでよ？ どっちも一長一短だからね」

綺麗な顔を困った風に歪ませる日和だが、月葉はそんなことを訊くつもりなどなかつた。

「姉さん」

と？雷獸？の魔導書を脇に抱えた真夜が戻つてくる。

「後は任せる。商談は姉さんが得意だろ？」

言いながら真夜は魔導書を日和に押しつけた。日和は「了解よん」となにやら楽しげに承諾すると、向こうで「わ、儂の書庫が……コレクションが……」と哀れに思えるくらい放心している紀佐桐吾と、彼を宥めている依姫の下へ歩み寄つていく。あの状態で商談なんてできるのだろうか、と心配になる月葉だつた。

その後、日和は意味のわからない言葉を並べ立てて紀佐桐吾から魔導書を買い取っていた。『暴走魔導書の処理代』がどうのこうのと聞こえたので、恐らく買い取り値を極限まで下げていたのだろう。放心状態の桐吾はただうんうん頷いているだけだったので、なんかやりたい放題のように見えた。

「わたくし、是洞さんのことあまりよろしく思つていなかつたのですが、今日で印象が変わりました。こんな身近に魔術師の方がいらっしゃったなんて感激です！あの、魔導書というものについて詳しくお訊きしてもよろしいですか？普段からお読みになつている本も魔導書なのですか？それと是洞さんはどこから本の出し入れを？それから

「……お前、少し黙つてくれ」

スイッチの入った依姫は目の中の色を変えて真夜に一方的な質問攻めをしていたが

「是洞さん！是非わたくしにも魔術の使い方を教えていただけませんかっ！」

果てにそんなことを言い出したので、月葉たちは彼女から逃げるようには紀佐邸を退散したのだつた。

「依姫ちゃん、なんか凄かつた……」

普段は清楚で落ち着いている彼女にも、あそこまで興奮する趣味があるのだと知つて少々気疲れした月葉である。

「フン、政府の上層部や上流階級の人間には魔術を認識している者も少なくない。あいつみたいな趣味を持つていてる奴がいたところで別に不思議はないだろ」

「……いちいち鼻を鳴らしてると感じ悪いよ、是洞くん」

「知るか。僕の勝手だ」

「仲がいいわねえ、お一人さん。もしかして学校でもイチャイチャ

してゐるのかな?』

『冗談じゃない』

『や、そそそですよ日和さん! 今日初めて話したくらいですよ!

「ところで真夜、車酔いは治つたのかしらん?』

『思い出させるな……うつ』

車内でそんな会話をしつつ是洞古書店に帰り着くと、外はすっかり夜の帳が下りていた。

月葉の想像していた通り、夜のは洞古書店はおどろおどろしい雰囲気がある。オバケはいなくとも妖怪くらい住んでいそうだ。

店内に入るとタイミングよく日和の携帯が鳴った。電話に出た日和は青い顔をしながら「ちょっと待つてねん」と言い残して外へ引き返していく。

何事が思つていたら、

『もうちょっとと締切伸ばしてくれたらヒヨリん嬉しいなあ、テヘ……え? ダメ?』

と外から聞こえてきたので、電話の相手は彼女が書いている小説の担当者だとわかつた。

「始めるぞ」

店の照明をつけた真夜が唐突にそう言つてきた。まだ若干辛そうだ。

「始めるつて、なにを?』

きよとつと首を傾げると、真夜は大層面倒臭そうに長い溜息を吐いた。

『……お前、もしかしてアホか?』

『し、失礼ね!? 私はこれでも成績いい方なんだから(中の上だけ)』

『知識があつてもアホな奴はアホだ』真夜はバツサリと切り捨て、

『お前、今ここにいる目的を忘れてるんじゃない?』

『あつ……』

真夜の言つ通り、月葉は頭からそのことがすっぽり抜けていた。あんな非現実を目の当たりにした後なのだから忘れたつて仕方ないだろう。そう反論してやろうかと思ったが、言い訳しているみたいで癪だつたので月葉は黙つてカバンから件の本を取り出した。それを認めると、真夜はどこか満足げに踵を返す。

「ついてこい」

命令口調でそう言つて、真夜は会計台の横にあるドアを開けた。ドアの奥には階段があつた。

一階に登る階段と、地下に向かう階段だ。

真夜は迷うことなく地下へ。月葉は少し躊躇つたが、真夜が待つことも振り向くこともなく進んでいくので勇気を出して後に続いた。階段は明かりをつけても薄暗く、底が見えないほど長い。この屋敷の住人が魔術師であることから、これより先は普通の世界ではない気がする。ホラーゲームを体感プレイしている気分だつた。いきなり天上から腐りかけの動く死人とかが落ちてきたら……と想像しただけで足がガクガクと小刻みに震え始める臆病者・月葉である。「ビクビクするな。別に人肉を喰らう怪物なんていない。余計なことせず僕の後ろを歩け」

壁に両手をついて亀のようにノロマになる月葉を、真夜は立ち止まって苛立たしげに見やる。だが、彼の口調は幾分か優しく感じた。おかげで気持ちが少し楽になつた。

もしかして是洞くん、私のこと気遣つてくれた? ……まさかね。

気のせいだと思い直していたら 力チツ。

月葉が手をついた壁からなにかのスイッチを押したような音。

「このアホがっ!」

「ひえ!?」

ぐいっと腕を真夜に引っ張られた月葉は、バランスを崩して彼に抱き留められる。そのことに羞恥心を覚える前に、紫色の光が轟音と共に薄暗い階段を照らした。

振り返ると、さつき月葉が手をついていた壁に魔法陣が描かれ、そこから何本もの紫色の電流が対面の壁へと流れていった。

紫電の防壁。真夜が咄嗟に腕を引っ張つてくれなかつたら、月葉は今ごろ黒焦げになつていただろう。

「あ、ありがとう」

月葉はお礼を言いつつ、密着状態の恥ずかしさが遅れてやつてきたため慌てて真夜から離れた。顔が自分でもわかるほどに紅潮している。

「だから余計なことをするなと言つたんだ。この店には姉さんが防犯対策に様々な魔術的トラップを仕掛けている。死ぬほどの仕掛けはないだろうがな」

「そ、そういうことは最初に言つてよー」

是洞古書店はオバケ屋敷じやなくて忍者屋敷だった。

「とにかく、痛い思いをしたくなればしっかりと僕の後をついてくるんだ」

真夜の態度にムツとするも、ここで逆らうわけにもいかない。観察していくわかつたが、真夜は時々ジグザグに動いたり一段飛ばしたりしている。それも月葉にもわかる大げさな動作でだ。そこにトラップがあることは理解できるが、そんな見てないと気づかない親切よりも口でちゃんと説明してほしいと思う月葉だった。

階段を下り切ると、そこには頑丈そうな鉄の扉があつた。奥が地下室だとしてなんの不思議もない厳つい扉だが、入つてみるとそこも数多の本が収容されている書庫だった。

窓と会計台がないことを除けば、一階の店と大差ない空間が広がつていて。ただよく見ると、ぎつしりと棚に詰められている本が魔導書や魔術書といった類の物だと今の月葉ならわかる。

本棚の間を縫つて奥へ行くと、部屋の中心に小さなスペースが設けられていた。そこには神殿の柱を切り取つたような大理石の台座がポツンと佇んでいる。

「お前の魔導書をここに置け」

「これからなにをするの？」

月葉は疑問を口にしながら言われた通り『開かずの本』を台に乗せる。

「その魔導書が開かないのは封印がかかっているからだ。そいつをこれから？ 解析？ する」

端的に言つと真夜は右手を真横に伸ばし、

「 第八十二段第一列」

唱えるのとほぼ同時に、虚空から一冊の魔導書を抜き取つた。何冊か見て思ったことだが、魔導書の色・大きさ・厚さはどれも似たり寄つたりで月葉には見分けがつかない。

「ねえ是洞くん、その魔導書を取り出したりするのもやつぱり魔術なの？」

「お前も紀佐みたいなことを訊くんだな」

「いいでしょ、気になつたんだから」

真夜は取り出した魔導書を開く前に、フン、と面倒臭そうに鼻息を鳴らした。それはもう彼の癖なのだろう。とつても捻くれた癖であるが……。

「魔導書使いは？ 書棚？ という自分がだけの魔術的空间を持つていて。？ 書棚？ に収納できる魔導書の数は術者の魔力量に比例し、僕が今やつたように取り出す時は収納している場所を唱えなければならぬい」

「……なんかパソコンみたい」

月葉は先日行つた選択科目の情報の授業を思い出していた。コンピュータのメモリには容量があつて、そこへ格納されるデータにはアドレスがつくとかなんとか。

「わかつたなら黙つて見ていろ。この？ 解析？ の魔導書を使うにはそれなりに集中しなければならないんだ」

真夜は『開かずの本』と向き合い、今し方手に取つた魔導書のページを繰る。

すると、大理石の台座を中心に薄青色の魔法陣が床に広がつた。

?雷獣?の魔導書を鎮圧する時に見た魔法陣とは違い、こちらは美術5の月葉でも模写することすらできそうにないほど複雑な紋様をしている。

魔法陣に連動し、真夜の持つている魔導書も薄青に輝く。一定間隔でページを捲っていく彼の横顔は真剣で、月葉は集中を乱しては悪いと思つて口を噤んだ。

「ハロハローー、やつてるわねえ。どんな感じ?」

と、重たそうな鉄扉を普通のドアと変わらない感覚で開けた日和が軽いノリで話しかけてきた。

「あ、日和さん、小説の方はいいんですか?」

「うつ……訊かないで、月葉ちゃん。大人には大人の事情つてものがあるのよ」

「どうやら締切は伸ばしてもらえたかったようだ。」

日和は真剣に作業に没頭している弟に視線を投げ、

「ふうん、あの真夜が?解析?の魔導書まで持ち出したんだ。相当厄介みたいね」

「あの、日和さん、是洞くんはなにをしてるんですか?」

「あはは、やつぱり真夜、ちゃんと説明してなかつたのね」

苦微笑する日和はそのメロンみたいな双丘を持ち上げるようにして腕を組む。

「あれは?解析?の魔導書つて言つてね、あらゆる魔術を分析してその構造や効果などを自動でページに書き記していく魔導書なの。使うために一級ライセンスが必要な上級魔導書の中でもトップクラスの複雑さだから、流石の真夜でもあんなに集中しないといけないんだよねえ」

「その、前にも言つてましたけど、ライセンスつてなんですか?」

「んとね、世界最高最大の魔術師協会『白き明星』が発行する魔書を所持・閲覧・使用するための許可証のことよ。他にも魔書の売買とかにも関つてくるわね」

魔書というのは確か、魔導書と魔術書のことだ。

「魔術にしても魔導書にしても、術者の力が及ばないものを使用すると肉体や精神が壊れたり酷い時には死んだりすることだってある。それを防ぐために設定されたのが魔書閲覧ライセンスってわけ。初級から特級まで六段階で分けられてるわ」

「なんとか検定みたいな感じですか？」

「そうそう、そんな資格試験みたいな感じよん」

物わかりのいい月葉に日和はニコニコの笑顔を向けてくる。月葉は一人っ子なので、もしも姉がいるとすれば日和みたいな人がいいなと思った。

「……ふう」

息をついた真夜が？解析？の魔導書を閉じた。それと同時に床の魔法陣も消失する。

「終わつたみたいね、真夜。どうだつた？」

「フン、どうもなにも、まだ全体の五分の一も解析できていない」

「はい？ 終わらなかつたわけ？」

「流石は来栖杠葉のかけた封印だ。？解析？の魔導書を用いてもう簡単に調べがつくものじやなかつた」

残念そうに目を伏せる真夜。その様子に若干疲れの色を含んでいるような気がした。

大理石の台座に置かれていた『開かずの本』を手に取り、真夜はその黒真珠のような瞳で月葉を見た。

「そういうわけだ。悪いが、お前の魔導書はしばらく僕が預かる

「え？ ちょっと、どういうこと？」

「今日はもう閉店つてことだ。これ以上解析を続けると僕の体が持たない」

「だつたら本は返してよ。また来るから」

月葉は手を差し出して本を受け取ろうとするが、真夜は頑として返そようとしない。

「ふざけるな。無ライセンスどころか魔術師でもないお前に魔導書を渡せるか。封印の解析が完了して解除できれば内容くらいは教え

てやる。だが、その後でこの魔導書は買いたい。「やつれー

「ちょ、ちょっと勝手過ぎないかな！ その本は私にとつてお母さんの形見なんだよ！」

「だったらお前も魔術師になつてライセンスを取得すればいい。来栖杠葉の娘なら不可能じゃないはずだ。そうなれば買い取つた時の値で売つてやる」

「そんなん……無理だよ……」

真夜の言い分はきつと正しい。月葉があの魔導書を持つていることは、無免許運転をしていることと同義なのだから。

でも、月葉はどこにでもいる平凡な女子高生だ。魔術師なんて非現実な存在になるなんてそれはもう漫画かアニメの世界である。無理に決まっている。このままでは、母の形見は永遠に返つてこない。そう思つと急激に熱いものが込み上げ、月葉の目尻から水滴が零れた。

あれ？ 私、どうして涙が……？

こんなに悲しい気持ちになるほどに、月葉は母親との繋がりを求めていたのだろうか。

泣き顔を見せないために俯いた月葉の肩を、日和がそつと抱いた。「女の子を泣かせるなんて最低よ、真夜」

「僕はなにも間違つたことは言つていない。所持できる資格を得るまで売らずに取つておいてやるんだ。これでも良心的だろ？」

全く悪びれる様子のない真夜に日和は溜息を一つ。彼女も真夜の方が正しいとわかっているのだ。

「ごめんね、月葉ちゃん。でもこの真夜は特級ライセンスを持つ魔導書使いよ。信頼はできるわ。だから月葉ちゃんの知りたいことはすぐに教えてくれるはずよ。そう、アレよ。貸し金庫に預けてると思つてさ、元気出して、ね？」

「……はい、くすん。わかりました」

日和の慰めを受けて月葉はとりあえず了解したが、まだ諦め切れていなかつた。

と、そこに

「初級くらいなら、姉さんが教えればすぐ取れる」

真夜が？解析？の魔導書を？書棚？に仕舞いながら、ぼそりと呟いた。すると日和が「それよ！」と頭上で豆電球を光らせたみたいにパアと閃いた顔になる。

「ねえ、月葉ちゃん、私の弟子にならない？」

「え？ 弟子……ですか？」

月葉は指で両目涙を拭う。

「そうよん。丁度お店のアルバイトも欲しいなって思つてたところだし、バイトしながらお姉さんが手取り足取り教えちゃうぞ」

アルバイト。学校の校則では特に禁止されていなければ、月葉は家の家事全般を任せられているためそんなこと考えたこともなかった。

しかもこれはただのアルバイトではない。魔術師になるためにここへ通う名田上のアルバイトだ。承諾しまつと、月葉も非現実の道を突き進むことになるだろう。

でも。

聞くところによると、月葉の母親 来栖杠葉は魔術師の世界では有名人だったらしい。魔術師の道は、おぼろげな記憶の中にいる母親が通つたものと同じ道だということだ。

月葉が母親のことをあまり知らないのは、きっと住んでいる『世界』が違つたから。

魔術師になつたら、もっとお母さんのことわかるかもしけない。

だとすれば、迷うことはない。

小さい頃に憧れた魔法少女になれると思えばいい。右も左もわからぬ世界ではなく、是洞姉弟という道標もあるのだ。

覚悟が、決まる。

「……やります。私、アルバイトやります！」

ポジティブな想いと一抹の希望が、月葉の口を動かしていた。

是洞真夜は店の地下書庫に籠っていた。

店の一階に白室もあるのだが、真夜は自宅にいる間のほとんどの時間を地下書庫で過ごしている。理由は単純、ここの方が落ち着くのだ。

あれから三日が経つたが、例の魔導書の封印は未だに解析できない。魔術界屈指の魔書作家 来栖杠葉が仕掛けたと思われる封印は、魔術に対するプロテクトが尋常ではないのだ。

それでも、徐々にではあるが解析は進んでいる。現在わかつていることは、この封印は魔導書の暴走を防ぐ役割あることと、日に日に封印の力が僅かずつ弱まっていることだ。

後者がわかつたところで本日の解析作業を終え、真夜は休憩がら書庫内の隅にあるテーブルで別の魔導書を解読していた。実はこの地下書庫にある魔書は全て売り物で、真夜が今腰かけている椅子とテーブルは客との商談に使うための物だつたりする。

時計を見ると午後七時を回つたところだった。地下にいると時間の経過がどうも曖昧に感じる。

しばらく休憩していると、ペシペシ。後頭部を薄くて柔らかいなにかで叩かれた。

「……」

真夜は無視を決め込むが ベシベシ。更に力を込められる。

鬱陶しい。

「……なんの用だ？」

振り向かず苛立ちを孕んだ声で問うと、そいつは対面へと回り込んできた。セミロングに伸ばした髪に、ツユクサを模した縲色の髪留めをしている少女だった。濃い緑色を基調としたエプロンを高校の制服の上からかけ、首からはマジックで『是洞古書店 来栖』と書かれた即席のネームプレートが提げられている。

「せっかくコーヒー淹れたから持つてきてあげたのに、態度悪いよ、

真夜くん」

彼女 来栖月葉は、くりつとした目を猫のように釣り上げ、むうとした表情で真夜を睨んだ。言葉通り左手にはティーカップとミルクと角砂糖の瓶を乗せた盆を持ち、右手には真夜を叩いたと思われる布はたきを握っている。

「掃除道具と飲料物を一緒に持つてくるな。埃が入る

「入ればいいんじゃないかな？ 砂糖五個分くらい」

笑顔で本音を晒しながら月葉は盆をテーブルに置いた。真夜は先日、彼女の親の形見を取り上げるような真似をしたため、それを根に持たれているのだ。

「というか聞いてよ。日和さんってば全然魔術のこと教えてくれないんだよ。小説の方が忙しいのはわかつてんんだけど、これじゃあ約束が違うと思わない？」

月葉は一日前からこの是洞古書店でアルバイトをしている。しかしそれは建前上であり、本来の目的は是洞日和 真夜の姉から魔術師となるためのイロハを教わることである。やかましくて迷惑千方百だ、と真夜は思うが、自分が原案を出したようなものだから今さら文句は言えない。

「……」

真夜は月葉の愚痴に対しても言わず、コーヒーにミルクをたっぷり注ぐと、角砂糖の瓶を傾けてボトボトと適当な数を放り込んだ。

「うわっ、真夜くん、それ砂糖入れ過ぎじゃない？ 糖尿病になつても知らないよ？」

「魔書の解読には頭を使う。糖分は必要だ」

「それにしても多いと思うけど……十個以上あつた瓶に二個しか残つてないし、飽和してるし」

月葉は味でも想像したのかしかめつ面をしている。そんな彼女になど構わず、真夜は甘つたるいコーヒーを平然と口にするのだった。

「どこのお前、僕に愚痴を零しに来ただけか？」

「お前じゃなくて『月葉』。ちゃんと名前で呼ばないと日和さんが怖いよ?」

愉快そうな笑みを浮かべる月葉に指摘され、真夜は苦々しく舌打ちした。

事の発端は一日前、月葉のアルバイト初日に日和が『是洞は一人いるから月葉ちゃんもこの坊主を「真夜」と呼びなさい』と言い出したことだ。そのばつちりで真夜も彼女のことを名前で呼ぶように命令されてしまった。

いい迷惑だ。

当然、そう思つた真夜は「ンソマ」一秒で却下したが『ほほう、お姉さんに逆らうと毎日手料理を食べさせるわよん?』などと脅迫されでは真夜も首を縦に振るしかない。日和の料理は上手下手という言葉とは次元が違う。料理を魔術的に作成するためいろんな意味で危ないのだ。その証拠に、昨日好奇心で日和の手作りクッキーを食べた月葉が三十分ほど麻薬中毒者のようになりリップしていた。

だが一番いただけないのは、名前を呼ばれて嫌がる真夜を月葉が面白がつてしまつたことだらう。

「ほらほら真夜くん、昨日の私みたいになりたくなかつたら私の名前を言つて」「らん?」

「子供かおま……月葉は」

別に名前で呼ぶことに抵抗はない。ただ、慣れていないだけなのだ。

「よひしげ」と勝ち誇つたように胸を張る月葉。最近彼女が姉に影響されつづることは真夜にとつて悩みの種だつた。

「私はちゃんと仕事で來たのです。で、真夜くんは仕事もせずになにを讀んでるの?」

さり気なく嫌味を含ませた月葉が覗き込んでくる。真夜は開いていた魔導書を閉じ、

「こ」の前紀佐桐吾から買い取った？雷獸？の魔導書だ。魔術師協会に申請した所有者登録が完了したからこうして解読している？」

「あれ？ それも売り物だよね？ 勝手に解読しちゃつてもいいの？」

「なにかあつた時のために売り手側も魔導書を理解しておく必要があるんだ。だから魔導書の販売は一級以上のライセンスを取得している魔術師がないとできることになつていてる」

「ふうん」

納得しているのかしていないのか、適當な返事をする月葉。

「わかつたなら話しかけるな。邪魔だ」

言つと、月葉はムツと唇を尖らせた。

「こ」の地下室もお店なんだよね？ お掃除するから真夜くんも私の邪魔しないでよ」

「！ やめる！ 余計なことはするな！」

早速布はたきで棚の埃を落とそうとした月葉を、真夜は語氣を強めて制した。突然の大声に月葉の肩がビクリと跳ねる。

「余計つて……店内のお掃除はバイトの仕事なんだけど？」

「それは上だけでいい。ここはただの書庫じやない。魔導書の収容庫だ。知識のないやつが勝手に弄ると魔導書の暴走を引き起こすかもしれない」

先日のことを思い出したのか、『魔導書の暴走』と聞いた月葉は顔面を蒼白させて布はたきを引っ込んだ。

「地下は僕が管理しているから、お前は姉さんの手伝いでもやっていろ」

突き放すような口調で言つた真夜に、月葉は拗ねたように頬を膨らませた。

そのまま立ち去りうとする彼女だったが、なにかを発見した様子で戻つてくる。

「ねえ、真夜くん、その魔導書つてもしかして私の？」

月葉はそう言いながらテーブルに置かれた魔導書を指差した。

「やうだ。言つておくが、まだ教えられることはなにもないぞ」「まあ、それはわかつてゐるんだけど、ちよつと見せてほしいなあつて思つたりして」

そーっと慎重に手を伸ばしてくる月葉から、サツと真夜は魔導書を遠ざけた。

「ムツ」

眉を吊り上げた月葉が対抗して魔導書に掴みかかってくるがサツ。

「ていつー。」

サツ。

「そいひー。」

サツ。

「ムキーッー！」

「お前はサルか」

いい加減にウザつたくなつたので、真夜は魔導書を？書棚？へと収めることにした。

「ああっー！？」

空間に消える魔導書を見て愕然とする月葉。真夜が所有する魔術的空間？書棚？に仕舞えば彼女にはもうどうすることもできな  
いのだ。

「フン、奪い返そつなんて考へないことだ」

わかりやす過ぎる月葉の行動に真夜は短く溜息を吐いた。

「むう、マヨちゃんのイジワル」

「なつ、僕をその名で呼ぶな！」

ギロつと人を殺せそうな視線で睨んでやると、月葉は「あはは」と笑いながら駆け足で地下から逃げ出すのだった。

「まったく、本気で鬱陶しい奴だ」

真夜がそう漏らした直後

『ちよつと田和さん！ タッキ止づけたのになんでもう散らかって

るんですかっ！』

『いや違つのよ田葉ちゃん！』これには魔術的な深い意味があつてね』

『小説書くのに魔術いるんですか！ 嘘つかないでくださいっ！』

開けっぱなしの鉄扉の向こうから、女子一人の大声が地下まで届いてきた。

『……なんというか、あいつは書店の店員とこいつよ』

呆れ口調の真夜はぼつりと独りしゃべる。

『　田葉さん、みたいだな』

翌日。私立凜明高校 一年三組の教室。

「はふう～」

昼休みに入った途端、月葉は情けない声を出して机に突つ伏した。流石に毎日バイト先へ通っていたら疲労が溜まるのだ。午後の授業で居眠りしない自信がない。

なにも連日で出勤しなくてもよかつたと後悔する。日和からは好きな時に手伝ってくれればオーケーと言われているし、バイトをすることが本懐ではないのだから。

けれど……

あの一人、魔術以外のことになるとすっごくいい加減なんだもん。

黙つていられなくなつた月葉は主婦歴七年 切り上げれば十年になる魂に火をつけ、店内の掃除やらなにやらをこの三日間で猛然とやってのけていた。これでは家政婦だ。

真夜はいいとしても、大雑把な性格の日和はすぐに周りを散らかしてしまつ。度が過ぎてきたら真夜が動くらしいのだが、今日も行かないといと大変なことになつていそうだ。

要するに、月葉は放つておけないのである。

「……」

なんとなく恨みがましい視線でクラスメイトの真夜を探してみると  
が……いない。どうせいつものように図書館にいるのだろう。

と

「やっぱー、月葉。あまり景気のいい顔してないね。どつたの？」  
「お疲れのようですね。確かに先程の体育のバレー・ボールはハードでした」

八重澤理音と紀佐依姫が弁当箱を乗せた机を寄せてきた。  
「え？ そんなにハードだったっけ？ 楽しかったじゃん

「理音さんは大活躍でしたもの」

入学して二ヶ月経つた今でも数々の運動部からスカウトが来るほど、理音は運動神経抜群なのだ。四時間目のバレー・ボールでも、彼女はピョンピヨン飛び跳ねてほとんど一人で得点を稼いでいたように思えた。彼女と同じチームだったらまだ楽だつたろう。

「あつ！ もしかして月葉の顔面にクリティカルショット決めちゃつたのが後引いてる感じ？ だったらあたしのせいだ。『ごめん！』 拝み倒すように頭の上で両手を合わせてくる理音。いつも思うが、彼女は先走り過ぎだ。顔面ヒットは痛かつたけれど。

「えっと、そうじゃなくてね。なんて言えばいいのかな？ 家事を一軒分やつてる感じというか」

「そんなに忙しいのですか？ 是洞さんのお店のアルバイト」

「うん、まあ、私が自分で勝手に忙しくしてるんだけど、ど？ ……あれ？ 私、アルバイトのこと話したっけ？」

「わつ！ 馬鹿、依姫」

記憶になかったので訊ねてみると、理音と依姫は悪戯がバレた子供のような焦り顔になつた。

「……なんか、月葉は変な噂を立てられないために黙つているつもりだった。なのに

「……なんで知ってるの？」

ジト目で問い合わせる。すると観念したのか、理音がうなじの上辺りで結つた髪を弄りながら口を開いた。

「やはは……ほら、月葉ってさ、ちょっと前から忙しつて言つて付き合い悪くなつたでしょ？だからなんか怪しいなあつて思つて『昨日、ひつそり後をつけさせてもらいました。すみません、月葉さん』

笑つて誤魔化す理音と、素直にペコリと頭を下げる依姫。二人に尾行されていたことに月葉は全然気づかなかつた。彼女たちは探偵になれるかもしれない。

「そつかあ、二人には知られちゃつたのか」

クラスメイトの、それも男子の家でアルバイトをしているなんて知られたくなかったが、バレてしまつたのなら仕方ない。そもそもこの二人は無関係ではないし、アルバイトのことくらいは知つてくれていた方が今後とも都合がいいだろう（魔術師修行のことは言えないけれど。特に依姫には）。

「言つておくけど、変な意味はないからね。この前の開かない本関連でこうなつてるんだからね」

「ほほう、変な意味とはどういう意味かなあ？　おいちゃんわかんないなあ」

「り、理音さん、なんかそれ嫌らしいですよ」

二人が尾行していたことは軽く許し、そのまま三人でそれぞれの弁当箱をつつく。理音は購買で売つていたらしい鶏のから揚げ弁当、月葉は卵焼きやタコさんワインナーの入つた平凡な手作り弁当、依姫は一流シェフが作つたような色鮮やかなクラブサンドをバスケットから取り出していた（これでも金持ち度を手加減しているとか）。

「ところで月葉、バイト代いくら？」

「えつと、時給五百円くらいかな」

「少なつ！？ 最低賃金以下じゃん！？」

「まあ、例の本の鑑定料を引かれてるから」

「だとしても少ないと思います。抗議してみてはどうでしょ？」

そんな感じに和気藹々と談笑したり、弁当の中身を交換したりと、普段通りに昼休みの時間が過ぎ去つていく。

そして

「（依姫ちゃん、ちょっとといいかな？）」

先に食べ終わつた理音がトイレに立つた隙を見計らい、月葉は声のボリュームを落として依姫に訊ねた。

「（なんですか、月葉さん）」

月葉の真剣な声になにかを感じ取つたらしい依姫も小声になる。

「（依姫ちゃんつて、魔術師のこと知つてたの？）」

それは月葉がずっと気になつっていたことだ。学校では理音か他の

誰かが近くにいてこれまで訊きそびれていたし、それ以外の時間はバイトや家事で手一杯だった。しかも月葉は今時の女子高生にしては珍しく携帯電話を持つていなかった。もつすぐ来る誕生日に父が買ってくれることになっている。

「（はい、そのような方が実在することは存じてありました。ですが、本物を見たのは先日が初めてです）」

上流階級の人間の中には魔術を認識している者も少くない。そう真夜が教えてくれたけれど、どうやら本当のようだ。でなければあんな非現実を見た依姫がその後も平然としていられるはずがない。

「うん、ありがと依姫ちゃん。それが訊きたかっただけだから」納得した月葉は声を元の大きさに戻した。もつと突っ込んだ話もしたかったが、これ以上は彼女のオカルトマニアモードを起動させてしまう恐れがある。学校では金持ちであること以上に隠しておきたい趣味らしいので、あまり刺激しない方がいいだろう。

「たつだいま　　つて、なあに一人でコソコソ話してんのかな？怪しいなあ」

元気よく戻ってきた理音がお得意の一いつや顔で問い合わせる。対する月葉と依姫は顔を見合わせ

「秘密だよ、理音ちゃん」「秘密です」

「むむむ、この理音様を除け者にするとは言い度胸だねフツフツフツ」

その後、月葉はプロレス番組を欠かさず見ていくという理音に緩くチョークスリーパーを決められるのだった。

場所は移動し、是洞古書店。

静寂で閑散とした店内にただ一人、是洞田和は会計台の椅子に腰かけてひたすらノートパソコンと睨み合っていた。

日和が手掛けている小説の執筆である。内容は現代に隠されて存在する魔術学校を舞台としたファンタジー・ラブ・コメディーなのだが、その『本当に魔術がある』と読者に思わせるリアリティのおかげで『大』はつかないまでもそこそこヒットしている。本物の魔術師が本当に魔術学校をモチーフとして書いているのだから、リアリティがあるのは当然だ（無論、素人が真似しても魔術は発動しないようにしている）。

「あうー、頭痛いわあ」

締切まで残り三日。しかし全体の半分しか完成していないという現状に日和は突っ伏した。雰囲気出るかと思って執筆中には伊達眼鏡をかける日和だが、それで頭が冴えたりすることはない。

「えーと、これがこうでここがこうなってるから、この辺でのキヤラを出して　いやそれだと矛盾が……。ああもう！　どうやつたらうまく纏まるのかしらね！」

懸賞金田当てで書いた上、既に完結しているつもりだったのに続編なんてこれっぽっちも考えていないかった。編集部に認められるほどの文才はあるが、構想を練ることに関しては非常に苦手な日和である。プロットなど生まれてこの方一度も作ったことがない。

「やっぱ向いてないかなあ、作家」

とは思うものの、皮肉なことに本業の古書店よりも収入がいいからやめるわけにはいかないのだ。

伊達眼鏡を時々クイクイさせてうんづん唸っていると、店の扉が開く音が聞こえた。

「いらっしゃいませ〜」

霸氣のない挨拶をする日和。店主としてどうかと思つけれど、日和にそこを正す意思はない。ここへ来る客は一般。ピー・ポーではない方が多いからだ。魔術師という生き物は店員の愛想なんてアウトオブ眼中。振り撒くだけ無駄といつものである。

「失礼、是洞古書店という店はここで合ひていいかな？」

会計台の前に立つた客が紳士然とした口調で声をかけてきた。対する日和はパソコンの画面から目を離さずに、

「そうだけど、表の看板見なかつたのかしら？」

「私はまだ『漢字』というものには慣れていないくてね。難しい字は読めないのだよ」

台詞に不自然さを覚えた日和が客の方に視線を向けると、そこにはアッシュ・ブルondenのロン毛をした長身瘦躯の青年が立っていた。グレーの燕尾スーツをキッチリと着こなし、やり手の営業マンを思わせる雰囲気を醸し出している。

切れ長の青い目に高い鼻　　西洋系の外国人だった。『漢字』に慣れていないのである。しかし喋っている日本語はとても流暢だ。よく訓練されている。

激しく胡散臭さを感じるが、彼も歴としたお客様だ。

「それで、ご用件は？」

「ある本を探している」

「タイトルを言つてくれないとわからないわよ？」

「ふむ、それもそうだ。だが生憎とタイトルは私も知らなくてね」ネットで調べてから来なさいよ、と日和は心の中で毒づいた。しかし青年はそんな日和の内心など知らず、どこか誇示するように言葉を続ける。

「来栖杠葉氏の魔導書がここにあると聞いて来たのだよ

「へ？」

日和は青年の言葉をすぐに理解できず間抜けな声を上げた。

来栖杠葉の魔導書。あるとしたら、あの一冊だけだ。けれど、あの本がこの店にあるなんて宣伝をした覚えはない。真夜が人様の物

を言い触らすような真似はしないだろうし、持ち主の丹葉に至つては論外だ。

「あなた、魔術師ね。その話はどこから聞いたのよ？」

警戒心を高めて訊ねると、青年は口元を不敵な笑みで歪めた。

「ある情報屋から情報を買ったのだよ。おっと、その情報屋のことは訊かないでくれたまえ。私もよくは知らないのでね」

釘を刺されたが、情報屋なる者については後で調べた方がよさそうだ。

「じゃあ、あなたのことを聞かせてくれるかしら？」

「これはうつかりしていた。私としたことが、レディーを前に名乗りもしなかつたとはね」

青年は、うおほん、と咳払いをし

「私はアドリアン・グレフ。二級閲覧ライセンスを持つ元貴族の魔導書使いだよ」

そう名乗つて魔術師協会発行の証明書を掲示した。元貴族だなんだか知らないが、たかが一級のくせに随分と尊大な物言いだ。日和は青年に対する好感度を水平線からやや斜め下へと傾けた。

「では、レディーの名前をお聞かせ願つてもよろしいかな？」

「是洞日和、一級閲覧ライセンスを持つ魔術師よ」

あてつけるように『一級』の部分を強調する日和だが、アドリアンは微塵も動じなかつた。魔書の販売を行つてゐる時点で一級以上のライセンスを取得してゐることは周知だからだらう。

「是洞日和氏、なんて可憐なお名前だ」

「お世辞はいいわ。気持悪いから」

紀佐桐吾のようにそういう言葉は心から言つてもらいたいものである。

「失礼。それで本題だが、来栖杠葉氏の魔導書を売つてもらいたい

「残念ね。あなたの探し物はここにはないわ」

「なに？ それは困つた」

芝居がかつた仕草でアドリアンは額に手をやつた。本当に困つて

いるのかわからない。

彼はしばらく日和には聞こえない音量でぶつぶつと呟いた後、こう持ちかけてきた。

「ふむ、では代わりに別の魔書を買おう。案内してくれたまえ」

お引き取り願つてもよかつたが、彼がまだ買い物をすると呴つので日和は商売人の顔になつた。

「あはっ そう来なくっちゃね。じつちよ」

ただし、ぼつたくりを企む悪徳商売人の顔だつたが……。

日和はアドリアンを地下書庫に案内した。当たり前だが、誰かが店番をしている時は防犯術式をオフにしているためスムーズに地下まで潜れる。

アドリアンは地下書庫内を見回し、日和に問う。

「これだけかね？」

「少なくて悪かつたわねえ。もつとも、一級以上の魔書はさうに下よ。あなたは二級でしきう？ だからそこへは案内できないわ」  
是洞古書店の構造は二階が自宅、一階が一般書店、地下一階が二級以下、地下二階が一級以上の魔書収容庫となつていて、二級以下と一級以上では重要性が変わつてくるのだ。

「それは構わない」

アドリアンは適当な棚から適当な魔書を取り、日和に見せる。

「これをいただこうか」

「いいけど、それ魔術書よ？ あなた魔導書使いじゃなかつたつけ？」

「いいのだよ。私は魔術書も集めているのでね」

不遜な態度で言いながら、アドリアンは懐に手を入れた。彼がそこから取り出した物は万札の束、それも一個。

「これで足りるかな？」

アドリアンは気障つたらしく白い歯を見せてはにかみ、二個の札束 恐らく二百万円 を日和の手に優しく握らせた。

「え？ こんなに？ 足りるもなにも、これここまで大した魔術書

じゃないわよん？」

大金を前に目を輝かせる日和。初めからぼつたくるつもりだったが、予想以上の展開に思わず語尾を碎いてしまうほどテンションが跳ね上がる。簡単に確認するも、二セ札ではなさそうだ。これほどの大金を前にしたのは小説が受賞した時以来である。

「構わない。ただし、そこには情報料も含まれていてね。少々お聞きしたいことがあるのだが？」

「いいわよん。私の答えられる範囲ならなんでも教えてあげるわ」思わず儲けに日和はすっかり浮かれてしまっていた。だから「来栖杠葉氏の魔導書なのだが、君は『ここにはない』と言つていた。それはどこにあるのか知つている者の言葉だ。どうか教えてもらえないかね」

つい、口を滑らせてしまった。

来栖杠葉の娘のことを。

「つーきはっ！ 今日こそこそ逃がさないからね。一緒に帰ろうか」放課後、教科書等をカバンに片づけていた月葉の後ろから、理音が抱きついてきた。

「レツシ寄り道だあ！ 商店街に新しくケー キバイキングのお店ができるつぽいからそこ行こそ」

「うん、いいよ。でもその後で私はバイト行くから」

「むう、毎日バイトやつてると身が持たないよ？ 風邪とか引いたらこの家庭科1の理音様があんなことからこんなことまで看病しちゃうぞムフフフ」

「え、遠慮しとくよ。ていうか手つきが嫌らしいよ理音ちゃん」理音の抱擁から解放された月葉はカバンを持って席を立った。そこでいつも一緒にいる友人が一人足りないことに気づく。

「依姫ちゃんは？」

「んー、なんか用があるから先に行つてオッケーだつてさ」先生と進路相談でもしているのだろうか、と特に疑問を持たずに月葉は理音と二人並んで下校する。

「月葉つてさ、ママのことどれだけ覚えてる？」

廊下を昇降口に向かつて歩いていると、理音がなんの前触れもなくそう訊いてきた。

「え？ どうしたの、理音ちゃん？ いきなり」

「やはは、いやあ、あたしもここ数年親と会つてなくつてさ。ママの残した本のためにバイトまでして頑張つてる月葉見てたら思い出しちゃつて。なんとなく訊いてみただけ。あつ、気分悪くしたらごめん！」

また摔倒すように両手を合わせられた。周りの生徒から好奇の視線が集い、月葉は慌てて手を振る。

「えつと、それは別にいいよ。ていうか、理音ちゃんつてもしかしき」

て家出してるの？」

「違う違う。まあ家は出でるけど、あたしんちは基本的に家族円満だ。今はちょっと都合で離れ離れになってるだけ」

海外転勤とかそういう事情なのだろう。理音が少し寂寥とした表情をしたので、月葉はこれ以上追及しないことにした。

「で、月葉はどんなくらい覚えてるわけ？」

「んと、正直言うと全然かな。前にも言つたけど、あまり会つたことがなかつたから」

頑張つて記憶も巡つても、やっぱりそれしか言えなかつた。する

と、理音が感心したように目を真ん丸に見開く。

「ほえー、それなのに頑張れるんだあ。月葉つて凄いよ」

「全然覚えてないからだよ。だからお母さんのこと知りたいって思えるんだ」

「なるほどなるほど、言われてみればそつかもね。そんじゃあ月葉、ママの本のためにアルバイト頑張りなよ。あたしも応援してる。途中で投げ出したらストレートアームバーをかけるぞフフフフフ」

空恐ろしい笑いを漏らしながら自分の腕をペシペシ叩く理音に、これは絶対投げ出せないと思つた月葉だった。

昇降口を出たところであつさりと依姫を発見してしまった。

「あつ、あれつて依姫ちゃんど……え？」

彼女は野球のバックネット裏にいたのだが　そこにはもう一人、綺麗な黒髪をした男子生徒もいた。

「ややや？　なんで依姫、ネクラ野郎と一緒にいるんだ？」

そう、是洞真夜だ。どうも二人でなにかをコソコソと話しているようで、人がいないバックネット裏で密会といった雰囲気である。しばらく様子を見守つていると、真夜が突き放すようにその場を去つていった。残された依姫はどこかしゅんとした悲しげな様子だ。

依姫ちゃん、なにを話してたんだろう？

不安げに依姫をじつと見詰める月葉を見て、理音が鼻息を荒げる。

「修羅場！？ なにこれ修羅場！？ 月葉の彼氏に親友が告白！ あたしの周りでまさかの三角関係発覚なのかつ！？ 次回に続く！」

「落ち着いて理音ちゃん続かないから！ あと彼氏じゃないから！ 断じて彼氏なんかじゃないから！」

すると、騒ぎ立てる月葉たちに気づいた依姫が小走りで駆け寄つてくる。

「月葉さんに理音さん、お恥ずかしいところを見られてしまったようですね」

依姫は少し照れたように頬を染めて微笑んだ。泣いた様子はないし、強がっているわけでもない。普段通りの彼女だった。

「依姫ちゃん、その、なんの話をしてたの？」

月葉が訊くと、依姫は少し逡巡するように口籠つた。彼女は興味津々とメモ帳まで構えている理音をチラ見し

「すみません、内緒です」

苦笑混じりにそう答えた。

「ムフフ、内緒と言われたら知りたくなるのが人の性！ 甘い物でも食べながらじっくり話を聞かせてもらおつか。ねえ、月葉」

「理音ちゃん、そのニヤ顔もうやめない？」

「ケーキバイキングに行くのでしたね」

というわけで、三人は適当な会話をしながら商店街へ向かうことになった。

商店街は学校から徒歩で約十五分の距離にある。理音の言っていたケーキバイキングの店は月葉も知っていた。なにせバイトに行くため毎日商店街を通っているのだ。

「あつ、そうだそうだ月葉。午後の授業のノートなんだけど、後で見せてくんない？」

商店街通りに入った時、唐突に理音が月葉に頼み事をしてきた。

「え？ 理音ちゃん、ノート取つてないの？」

「理音さん、ずっとお昼寝してましたもの」

理音とは席が離れているとはいって、月葉は全然気づかなかつた。

それどころか先生も一切注意していなかつたように思える。バレンタインの日だらう。相変わらず彼女は曲者だ。実は月葉も五分ほど夢の世界へ旅立つていたことは秘密。

「ごめん、理音ちゃん。私も一部ノート取れてないから、依姫ちゃんに頼んで」

「バツキヤロー、月葉！ 失恋で傷心中の友達にノート貸してなんて言えるかあ！」

「あの、理音さん、わたくし別に失恋したわけじゃ……」

「こことは保留中？ 三角関係続行？ トゥーベー・コンティーユード？」

「いえ、ですから、そういうことではなくて」

依姫が言いかけたその時 理音が急に立ち止まつた。

そして具合でも悪そうに頭を抱えて蹲る。

「理音ちゃん？」

「どうされたのですか？」

月葉たちが近寄ると、彼女は「ヤバイヤバイヤバイ」と幽靈にも取り憑かれたように連呼している。

顔を覗き込もうとした月葉に、深刻な表情の理音が掴みかかってくる。

「ヤバイよどうしよう月葉！ あたしテニス部に試合の助つ人頼まれてたんだつた！ もうバイキングはすぐそこだけ……友達と依頼、あたしはどうちを選べばいいんだあ！」

なにがあつたのかと思つて心配した月葉だったが、どうやら大したことなさそうでほつとした。

「もう、ビックリさせないでよ理音ちゃん。それなら早く行つてきなよ。バイキングは明日付き合つてあげるから」

「そうですよ、理音さん。試合の助つ人は明日だとできません」

説得させられ、理音は一人に背中を向けて立ち上がる。

「うん、わかった。そだね。よーし、ヒーローは遅れて登場しよう

じゃあないか！　月葉、依姫、明日は絶対バイキング行くから予定空けときなよ！」

月葉と依姫はダッシュで来た道を戻つていく理音を見送る。そして彼女の姿が見えなくなつてから、依姫が月葉を向いた。

「では、月葉さん、わたくしもバイオリンのお稽古がありますので」「あれ？　依姫ちゃんも用事あつたんだ……」

「はい。ですが、サボるつもりでした」

てへ、とでも言うように依姫はチョロリと舌を出した。かくいう月葉もバイトがあるし、理音がいなくなつたためこれ以上寄り道をする気にはなれない。

依姫には訊きたいこともあつたが、彼女は手早く別れの挨拶をすると駆け足でこの場を去つていった。実はかなり時間が危ないのかもしれない。

まあいいか。バイトの時に真夜くんに訊けば。  
教えてくれるかどうかは激しく謎だけれど。

「君が来栖月葉嬢だね」

その時、背後から知らない男性の声がかけられた。

振り返ると、グレーの燕尾スーツを着た外国人男性が道の中央を通つて歩み寄つてきていた。銀髪のロン毛を揺らし、切れ長の青い目がはつきりと月葉の姿を捉えている。

彼の歩き方は悠然としていて品がある。どこかの国のお金持ちかもしれない、とお金持の友人がいる月葉は直感した。

だがやはり、知らない人である。月葉に外人の知り合いはない。「あなたは？」

「私の名はアドリアン・グレフ。魔導書使いだ」

魔導書使い。

真夜くんと同じ……。

月葉は後じさつた。魔導書使いが月葉に声をかけるなど、可能性

としてはただ一つしか考えられない。つまり、母親関係だ。

「待ちたまえ、別に君に危害を加えるつもりはない」

今にも逃げ出そうとしていた月葉をアドリアンと名乗った男は制した。本当に危害を加えるつもりがないことを証明するためか、両腕を大きく広げている。

「私に、なんの用ですか？」

「ふむ、单刀直入に言おつ、君の母 来栖杠葉氏の魔導書を譲つてもらいたい」

「嫌です」

それしかなじだらうと予測していた月葉は事前に返事を用意していた。

「金なら言い値の倍払おう」

「どれだけお金を積まれても譲る気はありません。それに今私はお母さんの魔導書を持つてません。だから帰ってください」

真夜に『預かつて』もらっていることはもう構わない。そのうち必ず取り返してみせるからだ。しかし、この得体の知れない男に渡つてしまふと、魔導書の内容すら知ることなく一度と戻つては来ないだろひ。

内容と言つても、魔導書の時点でなんらかの魔術だということはわかっている。それでも月葉があの本を手離さないのは、ただ一冊だけ自宅に置いてあつたからである。魔導書が暴走することを魔術界で有名だった母が知らないわけがない。わざわざ封印まで施して自宅に置いたのには、きっと意味があるのだ。月葉はそう信じている。

アドリアンが呆れたように肩を竦める。

「やれやれ、是洞日和氏の言つた通りだ

「！ どうこいつことですか！」

彼の口から日和の名が出たことに月葉は動顛する。

「いやなに、君の情報は是洞日和氏から買ったのだよ。随分と金を積ませたが、来栖杠葉氏の魔導書が手に入るのなら安い買い物だ。

ただ、売つてくれないだうとは言われていてね。実際その通りになつてしまつた

「日和さんが私を……そんなこと、あるわけない。嘘を、つかないでください」

日を重ねていくにつれて実の姉のように思つてきた彼女が、月葉を卖つた。とても信じられることではなかつた。いや、信じたくない。

「嘘じやない。人間誰しも心の隙を突けばなんだつて話すものなんだよ」

アドリアンは頃垂れる月葉を見下して不敵に笑い、

### 「第一段第一列」

「 ッ！？」

聞き覚えのある呪文を日本語で唱え、虚無の空間から一冊の魔導書を取り出した。

それからその魔導書を月葉に見せつけ、自慢するよつて語る。「これは？曝露？の魔導書と言つてね。私の問い合わせに対し強制的に『真実』を答えさせる力を持つている。もつとも、是洞日和氏のような上位の魔術師が相手だと、大金を握らせるなどして心に隙を作つてもらう必要があるがね」

じゃあ、日和さんはあれで……。

日和が自らの意思で月葉を卖つたわけではないと知つて安堵すると同時に、そこまでしたこの男を月葉は善人だとはとても思えなかつた。正直、暴漢に絡まれるよりも怖い。

逃げないと！

「だから待ちたまえと言つている「きやつ！？」

今度こそ本気で逃げようとした月葉の腕を、アドリアンが魔導書を持つていないので右手で掴んだ。そのまま力任せに月葉は引き寄せら

れる。

「だ、誰か！ 誰か助けてください！」

大声で叫ぶが、誰一人として月葉を助けにくる勇者は現れなかつた。それどころか

嘘つ……なんで？

月葉は驚愕する。普段は活気に満ち溢れているはずの商店街に、人っ子一人としていなかつたのだ。

「この辺りには？人払い？の魔導書の力が働いていてね。呼んだとこで誰も来やしない。君の友人たちが最後だつたよ」

理音と依姫が別れたのは偶然ではなく、アドリアンの仕業だつたのだ。

やだ……こんなのがやだよ……。

「さて、危害を加えないと言つた手前悪いが、次は君が口を割る番だ。さあ、私の目を見る。 来栖杠葉氏の魔導書はどこにある？」アドリアンの持つ魔導書が強烈に輝き、その光が月葉を包む。どこか生温く気持悪い感覚が体を侵蝕していくよつに広がる。

「あつ……」

頭がぼーっとしてきた。視界もぼんやりする。自分がなにを考えているのかすら、もう月葉にはわからなくなつっていた。

「お母さんの、魔導書は？」

口が、月葉の意思とは無関係に言葉を紡ぐ。

「貴様、なにをやつている？」

寸前、誰かがアドリアンの右腕を掴み上げた。彼に捕まつていた月葉は突然の解放に尻餅をつく。

「……何者かね、君は？」

？曝露？の魔導書の光が弱まる。月葉の意識が鮮明になつていく。

そこにいたのは

「一般人に魔導書を使うような下衆に、この僕が名乗るとでも？」

だつ  
た。  
真夜  
くん！

時は少し遡る。

是洞日和は悔やんでいた。

マズつたわ。どうしましょ？

大金を握らされて浮かれてたとはいえ（あの後三百万ぼったくつた）、まさかアドリアンが？曝露？の魔導書を持ち出してくるとは思いもしなかつた。

日和が上級魔術師だったことが災いし、その抵抗力から『ビル』にあるか『の質問に対しても持している真夜ではなく、持ち主である月葉のことを喋ってしまった。

真夜だつたら日和がここまで悩むことはなかつた。しかし、月葉だと話は別だ。

彼が物理的に一般人を傷つけるとは考えたくないが、あの手の魔術師はどんなことをしても目的の物を手に入れようとするだろう。アドリアンの魔書閲覧ライセンスは一級だ。そして？曝露？の魔導書も一級。人を意のままに操るような力を持つた魔導書はまず持つていないと考えられる。だが、まだ魔術師見習いですらない月葉に対してだと？曝露？だけでも強力過ぎる。

月葉に連絡を取りたいところだが、生憎と彼女は携帯電話を持つていないらしい。

大丈夫だとは思いたいけれど、念のため対策は打つておかなければ安心できない。

日和は会計台に放置していた携帯電話を手に取り、登録していた番号にかける。

「もしもし、真夜？ うん、ちょっとめんどくさいことになつちやつて」

簡単に状況説明をし、通話を終える。

日和は会計台上のノートパソコンを見る。

書いてる場合、じゃないわよねえ。

パソコンをスリープ状態にし、一応店の防犯術式も稼働させ、日和はアドリアンを探して外へ飛び出した。

短いので毎日1回もつ一話更新します。

是洞真夜がアドリアン・グレフと対峙している。

月葉はただその光景を、ペタンと地面にお尻をついた状態で呆然と眺めていた。まだ靄のかかつた頭で考える。

「真夜くんが、助けに来てくれた？ 私を？」

なぜだかわからないが、月葉は純粹に嬉しさが込み上げてきた。「君、今なんと言ったのかね？ 聞かなかつたことに対するからもう一度言いたまえ」

プライドを傷つけられたのか、アドリアンはわなわなと震える。真夜は漆黒の瞳でそんな彼を見据え、

「フン、貴様のような下衆の肩に、僕の名を覚えられたくないと言つたんだ」

さらにプライドを引き裂くようなことを口にした。鼻息の鳴らし方もいつも以上に見下した感がある。

アドリアンは端整な顔に引き攣つた笑みを浮かべる。

「ふむ、どうも最近耳の調子が悪いようだ。この国の言葉では『三度目の正直』と言うのだったか？ もう一度チャンスをやろう」

「飾りの耳なら切り落としてしまえばいい。少しは身軽になれるぞブチン！」と月葉はアドリアンの額から変な音を聞いた気がした。青筋が浮き出ている。初対面の人を怒らせる技術に関して真夜の右に出る者はそうはないだろう。

「君、元とはいえ貴族の私を侮辱したこと、まさか許されるとは思つていらないだろ？ うね？」

「知るか」

見ている月葉の方が焦つてしまつくらい真夜はバッサリと切り捨てる。月葉も魔術師になればこれほどの余裕持てるのだろうか。いや、きっと無理だろう。

「？ 人払い？ が効いていないということは、君も魔術師だね。私に

対する無礼は見逃してやるから、わざと逆えてくれたまえ。私は  
そのレディーに用があるのだよ」

指を差され、月葉はビクリと怖気づく。ひゅ、と小さな悲鳴も上  
げてしまった。

すると、アドリアンの指先から庇うように真夜が背中で月葉を隠  
してくれた。それから聞こえない音量でなにかを唱え

「貴様の用というのは、ここにないことだらう?」

?書棚?から取り出した一冊の魔導書をアドリアンに見せる。それ  
は紛れもなく月葉が『預かつて』もらっている来栖杠葉の魔導書だ  
った。

アドリアンが瞠目する。

「そうか、なるほど、君も魔導書使いだつたか。そしてそれが私の  
探し求めている来栖杠葉氏の魔導書。……ククク、これは面白い」  
忍び笑いをするアドリアンの口つきに鋭さが増す。彼はもはや月  
葉を見ていなかつた。真夜が魔導書を見せつけることでアドリアン  
の対象を自分へと変更したからだ。

「いいかね、君は私を侮辱した。その謝罪はきつちつとしてもらわ  
ねばならない。その魔導書を私に渡すという形でね」

「フン、なぜそこまでこれに拘る?」

「拘つて当然だ。私は魔書コレクターなのだよ。来栖杠葉氏の魔導  
書は複雑過ぎて初級だらうと複製は困難。つまり、彼女の魔導書は  
どれも世界に一冊しか存在しない。それを入手したいと願う魔術師  
に理由を聞くなど野暮だとは思わないかね?」

アドリアンは青い瞳にどこか狂信的なまでの執着心を宿してそう  
語つた。

魔書コレクター。確か依姫の祖父が古書コレクターだったことを  
月葉は思い出す。その魔書版ということだろう。

「君も魔導書使いなら、私の趣味はわかるのではないかね?」

アドリアンは真夜を説得しようとしているようだ。だが、真夜な  
らここで『ぐだらん』と一蹴するはずである。

言つて、真夜くん。そんな趣味などくだらないって。  
月葉は期待の眼差しで真夜を見詰める。が

「……」

真夜はだんまりだつた。

あれ？

趣味、わかるらしい。そういうえば彼は常に本と共にある。アドリアンほどの執着心は見せないが、実は彼もけつこうな魔書コレクターなのかもしない。ようやく納得してきた頃なのに、再び彼に母の形見を『預けた』ことが不安になつてきた月葉である。

「悪いが、こいつは預かり物だ。貴様に渡すことはできん。それに、貴様のやり方は気に喰わない。コレクターならコレクターなりの礼儀があるだろ？ 一般人に手を出すな」

前言撤回。やはり真夜ならば信頼できそうだと月葉は思い直した。

「……ならば仕方ない」

アドリアンは？ 曝露？ の魔導書を虚空へと消し、踵を返して二人から離れる。わかつてくれたのかと月葉は思ったが、違つた。

彼は十メートルほどの距離を空けて立ち止まると、振り返つてビシッと名探偵が犯人を示す時のような動作で真夜を指差す。  
「決闘だ。名も知らぬ魔導書使いよ。私が勝てばその魔導書を譲つてもらう。君が勝てば私は潔く諦めようではないか」  
彼の表情はいわゆるどや顔というやつだった。

「……いいだろ？」

「ちよつ！？ 真夜くん勝手に決めないでよつ！？」

賭けられた来栖杠葉の魔導書は一応月葉の物なのだ。所有者を無視してそういう話はしないでもらいたい。

慌てる月葉を、真夜は下がつていろとも言つように手で諫めた。  
そして彼はまっすぐにアドリアンを睨む。

「ただし、僕が勝った時の条件に一つ加えさせてもらひ

「なんだね？ 言つてみたまえ」

余裕綽々のアドリアンに対し、真夜は変わらない無表情で、

「こいつに謝れ」

端的にそう言つて、親指で後ろの月葉を示した。

「え？　え？　え？」

かあああ。

真夜の言葉の意味が理解できずに困惑する月葉だったが、どうい  
うわけか体中が熱を帯びてきた。恥ずかしいと感じる時に似た熱さ。  
すぐそこにある洋服店のショーウィンドウに映る自分を見ると、耳  
まで真っ赤になつてトマトみたいだつた。

あれ？　なんで？　え？

わげがわからず頭を振つて狼狽する月葉に、来栖杠葉の魔導書を  
？書棚？に仕舞つた真夜がぶつきら棒に告げる。

「お前は邪魔だ。その辺に隠れていろ」

「は、はい！」

反射的にいい返事をして立ち上がつてしまつ。それから月葉の体  
は勝手に動き、真夜の言つ通りに少し離れた電柱の陰に隠れた。  
「謝れ、か。そんなことでよいのであればいくらでも謝つてやうつ。  
君が勝てればの話だがね。　第一段第一列」

「僕に勝てる気でいるのか？　とんだ自己陶酔者だな、貴様は。

第三段第四列」

お互いが？書棚？から魔導書を抜き、ページを繰る。  
そして

「　　？火弾？！！」

重なる声と共に、双方から灼熱の業火球が飛び出し中央で激しく  
衝突した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9538x/>

---

ご不要な魔導書買い取ります

2011年11月23日12時47分発行